

MAKINOHARU

# 牧の原第2遺跡

総合農業試験場畑作園芸支場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1999年

宮崎県埋蔵文化財センター

MAKINOHARU

# 牧の原第2遺跡

総合農業試験場畑作園芸支場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1999年

宮崎県埋蔵文化財センター

## 序

埋蔵文化財の保護・活用に対しまして、日頃より深い御理解をいただき厚く御礼申し上げます。

このたび宮崎県教育委員会では、総合農業試験場畑作園芸支場整備事業に伴い、牧の原第2遺跡の発掘調査を行いました。本書はその報告書です。

牧の原第2遺跡では、縄文時代から近世にかけての遺構・遺物が検出されました。特に、縄文時代後期・晩期、弥生時代中期から古墳時代の遺物が調査区の全域で確認され、それに伴う住居跡も検出されました。また、15世紀後半に降下したとされる文明ボラを埋土に持つ中世の畑跡等も確認されました。

こうした先人の歩みを振り返り、郷土の歴史を解明する貴重な資料を得られたことは大きな成果と言えるでしょう。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、御指導・御助言をいただいた先生方、並びに地元の方々に心からの謝意を表します。

平成11年3月

宮崎県埋蔵文化財センター  
所長 田 中 守

## 例 言

1. 本書は、総合農業試験場畑作園芸支場整備事業に伴い、宮崎県教育委員会が行った牧の原第2遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は3次に分けて実施し、それぞれ次の期間で行った。  
平成8年度（第1次調査）平成8年11月25日～平成9年3月31日（担当：東・黒木）  
平成9年度（第2次調査）平成9年4月2日～平成9年7月7日（担当：久木田・黒木）  
平成9年度（第3次調査）平成9年7月8日～平成9年10月31日（担当：久木田・黒木）
4. 現地での実測・写真撮影等の記録は、主に東憲章・久木田浩子・黒木欣綱が行った。
5. 空中写真撮影は（株）スカイサーベイに、テフラ分析、プラントオパール分析は（株）古環境研究所に委託した。
6. 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成・実測・トレース・写真撮影は、久木田が整理補助員の協力を得て行った。なお、遺構トレースは廣田晶子（宮崎県埋蔵文化財センター）の協力を得た。
7. 本書で使用した位置図は国土地理院発行の5万分の1図を基に作成し、調査範囲図は都城市都市計画図の2千5百分の1図と都城市農政課作成の2千5百分の1図を基に作成した。
8. 土層断面および土器の色調は『新版標準土色帖』に拠った。
9. 本書使用のレベルは海拔絶対高であり、基準方位は磁北である。座標は国土座標第Ⅱ系に拠る。
10. 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。  
SA・・・竪穴住居跡    SB・・・掘立柱建物跡    SC・・・土坑    SE・・・溝状遺構
11. 本書の執筆は、第1章 第1節を石川、第1章 第2節・第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ章を久木田が行い、付編の自然科学分析結果報告は株式会社古環境研究所に委託した。なお、編集は久木田が行った。
12. 出土遺物・その他諸記録は宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

## 本文目次

第I章 はじめに	1・2
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1・2
第II章 遺跡の位置と環境	2・3
第III章 調査の成果	4~68
第IV章 まとめ	69~71
付 編 牧の原第2遺跡の自然科学分析	81~86

## 挿図目次

第1図 試掘調査出土土器	1	第18図 2区出土縄文時代の土器実測図	22
第2図 遺跡位置図	3	第19図 2区遺構・遺物分布図	23
第3図 基本土層柱状図	4	第20図 2区出土弥生~古墳時代の土器 実測図	24
第4図 遺跡周辺地形図	5	第21図 2区出土古代および中世の遺物 実測図	25
第5図 1区出土縄文時代の土器 実測図	6	第22図 3区出土縄文時代の土器実測図	26
第6図 牧の原第2遺跡グリッド点位置及び 調査区位置図	7・8	第23図 3区遺構・遺物分布図	27・28
第7図 1区遺構・遺物分布図	9・10	第24図 3区出土弥生~古墳時代の土器 実測図	29
第8図 1区出土弥生~古墳時代の土器 実測図	11	第25図 3区款状遺構実測図	32
第9図 1区出土弥生~古墳時代の土器 実測図	12	第26図 3区款状遺構土層断面実測図	33
第10図 1区出土古代および中近世の遺物 実測図	14	第27図 3区出土土器実測図	33
第11図 1区SB1実測図	15	第28図 3区SA1および小ピット断面 実測図	34
第12図 1区SB2実測図	16	第29図 3区SA1出土遺物実測図	35
第13図 土坑土層断面実測図	18	第30図 3区SA2実測図	36
第14図 1区SC1~6実測図	19	第31図 3区SC1~6実測図	37
第15図 1区SC7~13実測図	20	第32図 3区SC7~12実測図	38
第16図 1区SC14~19実測図	21	第33図 3区SC13~15・17・18実測図	39
第17図 1区出土時期不明の土器実測図	21	第34図 3区SC16・19~21実測図	40
		第35図 3区SC22・23実測図	41

第36図	3区SE1実測図……………	42	第44図	4区出土陶磁器実測図……………	54
第37図	4区出土縄文時代の土器実測図……	44	第45図	4区SC1～5・7実測図……………	55
第38図	4区遺構・遺物分布図……	45・46	第46図	4区SC6・10～12実測図……………	56
第39図	4区遺構・遺物分布図……………	47・48	第47図	4区SC13・14実測図……………	57
第40図	4区遺構・遺物分布図……………	49・50	第48図	石器実測図……………	58
第41図	4区SA1実測図……………	51	第49図	石器実測図……………	59
第42図	4区SA1出土土器実測図……………	52	第50図	石器および馬蹄実測図……………	60
第43図	4区出土弥生～古墳時代の土器 実測図……………	53			

### 表目次

第1表	土坑計測表(1)・(2)……	61・62	第3表	石器計測表……………	68
第2表	出土遺物観察表(1)～(5)	63～67	第4表	煙管および馬蹄計測表……………	68

### 図版目次

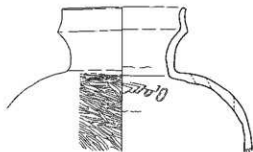
図版1～8……………	73～80
------------	-------

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

県総合農業試験場畑作園芸支場（郡城市花緑町）移転整備計画を策定中の県農政水産部農政企画課から、平成7年1月20日付で移転予定地（郡城市横市町1063番地他）における文化財所在の有無について照会があった。照会を受けた県文化課では同月に分布調査を実施し、移転予定地約98,000㎡のほぼ全域に、弥生土器もしくは土師器と見られる土器の細片が散布していることを確認した。県文化課は1月31日付でその旨を農政企画課に回答し、文化財の取扱いについて具体的な協議を開始した。

試掘調査は年度が明けて、用地買収の同意を得られた後、平成8年9月5日から7日にかけて実施した。試掘調査では同意を得られた畑地に30箇所の試掘グリッドを設定し、10箇所から遺構を、8箇所から古墳時代、中世の遺物を検出した。試掘調査の結果、移転予定地全体が遺跡と判断され、全てを調査した場合、長期の発掘調査が必要となり、移転整備計画に支障をきたすため、調査面積を極力減少させることで、県文化課と農政企画課の判断が一致した。圃場部分は、文化層に影響を与えないよう盛土で施工し、道路は、幹線道以外は盛土の未舗装道とするよう設計することとした。その結果、調査対象面積を建物部分と、幹線道部分約43,000㎡に押さえることができた。



第1図 試掘調査出土土器 (S=1/4)

工事の都合上、発掘調査は主幹線道約20,000㎡を平成8年11月25日から平成9年3月31日まで、管理・研究棟等の建物部分約15,000㎡を平成9年4月2日から平成9年7月7日まで、主幹線以外の幹線道路部分約8,000㎡を平成9年7月8日から平成9年10月31日までと3次に分けて実施した。

第1図の土器は試掘調査時に調査区東側（2区）で出土したものである。外器面に丁寧なミガキが施された二重口縁壺で、古墳時代前期に位置すると思われる。

## 第2節 調査の組織

### 調査主体

宮崎県教育委員会

平成8・9年度

教育長 田原 直廣(平成8年度)  
同 岩切 珉厚(平成9年度)  
文化課長 江崎 富治(平成8年度)  
同 仲出 俊彦(平成9年度)

宮崎県埋蔵文化財センター

平成8・9年度

所長 藤本 健一  
副所長 岩永 哲夫  
庶務係長 三石 泰博

## 埋蔵文化財

係 長 面高 哲郎(平成8年度)

同 北郷 泰道(平成9年度)

## 埋蔵文化財

主 査 石川 悦雄(平成8年度:調整担当)

同 永友 良典(平成9年度:調整担当)

## 調査第二

係 長 北郷 泰道(平成8年度)

同 岩永 哲夫(平成9年度:兼務)

## 調査第二

主 査 谷口 武範

## 調査第二

主任主事 東 憲章(平成8年度:調査担当)

## 調査第二

主 事 久木田浩子(平成9年度:調査担当)

## 調査第二

調 査 員 黒木 欣嗣(調査担当)

## 第二章 遺跡の位置と環境

牧の原第2遺跡は宮崎県都城市横市町1063番地他に所在する。都城市は宮崎県の南西部に位置し、市域は東側を鶴塚山地、西側を白鹿岳や瓶台山などの山地や霧島山系に囲まれた盆地の中央部にある。当遺跡は都城市街地の北西部にある横市地区に所在し、大淀川の支流横市川と庄内川によって南北を挟まれた成層シラス(二次シラス)台地である月野原台地南部に立地する。遺跡の標高は173~176mである。

当遺跡周辺の遺跡を概観すると、縄文時代早期の丸山遺跡(図2-5)が1.9km西の丘陵上にある。集石遺構や押型土器、竈ノ形土器が検出されている。1.5km南東の養原台地北端にある田谷・尻枝遺跡(図2-13)では縄文時代早期と中期の陥し穴が確認されている。田谷・尻枝遺跡の東に隣接する胡麻段遺跡(図2-14)でも縄文時代早期の土器が出土している。縄文時代中期後葉~後期初頭の阿高系の土器を出した上牧第2遺跡(図2-3)が0.7km西にある。当該期の竈穴住居跡2基が確認されている。縄文時代後期では正坂原遺跡(図2-20)が2.8km東南東の横市川右岸の中段河岸段丘上にある。縄文土器や指宿式土器、市来式土器が見られる。1.6km南南東の養原台地北縁にある加治屋遺跡(図2-12)や同台地内陸部に位置する西原第2遺跡(図2-16)では三万田式土器が出土している。縄文時代晩期としては、当遺跡対岸の養原台地北端の舌状部に立地する中尾山・馬渡遺跡(図2-10)があり、土坑群や孔列文土器が見られる。正坂原遺跡でも黒川式土器、刻目突帯文土器など晩期の土器が出土している。1km東の横市川北岸の低位段丘面上には陥穴遺跡(図2-15)がある。縄文時代晩期~弥生時代前期の集落跡や近世までの水田跡が確認されており、擦り切り石包丁の出土が注目される。

弥生時代では、当遺跡と同じ台地の南端に所在する月野原第2遺跡(図2-21)、母智丘山頂部の母智丘原第1遺跡(図2-4)で、中期後半頃の土器が確認されている。後期以降では、加治屋遺跡で後期末の竈穴住居跡7基確認され、同台地上の池原遺跡(図2-11)でも当該期の遺物が出土している。古墳時代では、横市川左岸の低位段丘に位置する鶴塚遺跡(図2-9)がある。都城初のカマドを伴う竈穴住居を含め68基の住居跡が確認された後期集落である。同時期の竈穴住居跡は月野原台地南部の母智丘原第2遺跡(図2-2)で確認されている。庄内川左岸の河岸段丘上には都城市で確認されている3



つの地下式横穴墓群の1つである菓子野地下式横穴墓群(図2-23)が立地している。

古代では平安時代の獨立柱建物とそれに伴う大量の遺物が出土する正坂原遺跡がある。特に墨書土器、越州窯系青磁、緑釉土器が注目される。

中世では、集落跡や水田・畑跡などの生産遺跡、山城などが多く確認されている。正坂原遺跡は古代末から中世にかけて営まれた集落跡で、中世の畑跡なども見られる。横市川左岸の低位段丘から低地にかけては、中世の水田跡が確認された畑田遺跡(図2-7)、母智丘谷遺跡(図2-8)、鶴喰遺跡がある。鶴喰遺跡では大型獨立柱建物跡や何部状遺構が確認されており、中世前半頃の居館址の可能性をもつ。鶴喰遺跡の北西部には、中世城郭(館城)である新宮城(図2-6)がある。なお、横市地区に隣接する庄内地区には遠堀をもつ安水城(図2-22)が存在する。

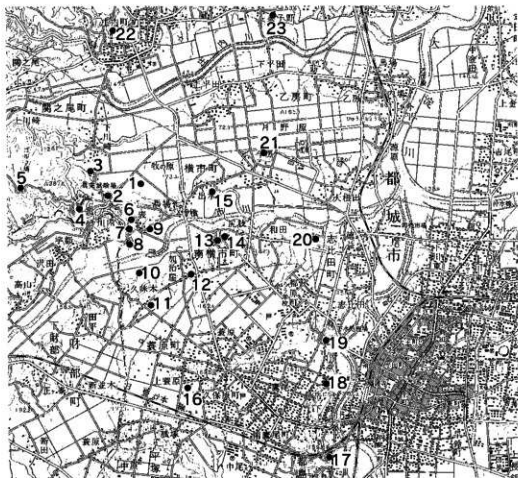
(参考文献)

都城市教育委員会「母智丘原第1遺跡 県指定志和地1号墳」『都城市文化財調査報告書第9集』1989

「田谷・尻枝遺跡」『都城市文化財調査報告書第38集』1997

「鶴喰遺跡」『都城市文化財調査報告書第44集』1998

「都城・中之城 菓子野地下式横穴」『都城市文化財調査報告書第3集』1983



- |             |             |                |             |              |
|-------------|-------------|----------------|-------------|--------------|
| 1. 牧の原第2遺跡  | 2. 母智丘原第2遺跡 | 3. 上牧第2遺跡      | 4. 母智丘原第1遺跡 | 5. 丸山遺跡      |
| 6. 新宮遺跡     | 7. 畑田遺跡     | 8. 母智丘谷遺跡      | 9. 鶴喰遺跡     | 10. 中尾山・馬渡遺跡 |
| 11. 池原遺跡    | 12. 加納屋遺跡   | 13. 田谷・尻枝遺跡    | 14. 朝麻段遺跡   | 15. 肤穴遺跡     |
| 16. 西原第2遺跡  | 17. 都之遺跡    | 18. 都城古墳       | 19. 二夕元遺跡   | 20. 正坂原遺跡    |
| 21. 月野原第2遺跡 | 22. 安水城跡    | 23. 菓子野地下式横穴墓群 |             |              |

第2図 遺跡位置図 (S=1/50,000)

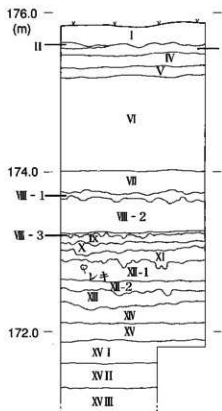
### 第三章 調査の成果

#### 第1節 調査の概要

調査は幹線道と建物部分の約43,000㎡の調査対象地を4区分し、3次に分けて行った。1次調査では主幹線道の1区(約5,410㎡)と2区(約1,990㎡)、2次調査は管理・研究棟等の建物部分の3区(約11,790㎡)、3次調査は主幹線以外の幹線道と建物部分の4区(約5,920㎡)である。試掘調査の結果から表土と耕作土を重機で除去し、後は人力によって遺物包含層の掘り下げ及び遺構検出を行った。遺物包含層と遺構検出面については第2節で述べる。1区において御池ボラ(第VI層)より下層の確認を深さ約4mの二次シラス層まで行った結果、無遺物、無遺構であったためその他の区では御池ボラ上面までの調査を行うこととした。

各区の詳細については第3節で記述するが、検出された遺構は竪穴住居跡3基(弥生? : 1, 古墳 : 1, 時期不明 : 1)、掘立柱建物跡2棟(時期不明)、土坑56基(中世?)、溝状遺構3条(時期不明)、畝状遺構(中世)、柱穴群等がある。遺物は縄文後期・晩期の土器、弥生中期から後期の土器、古墳時代や古代の土師器、中近世の青磁、陶磁器、その他に打製石鏃、磨製石鏃、打製石斧、磨製石斧、局部磨製石斧、磨石、石錘、馬蹄等が出土している。

#### 第2節 層序



第3図 基本土層柱状図 (S=1/40)

- I : 表土及び耕作土。文明白ボラを含む。
- II : 文明白ボラ。ほとんど残っていない。
- III : 文明白ボラ混黒褐色土。
- IV : 御池ボラ混暗褐色土。 ↓ 漸移的に御池ボラ
- V : 御池ボラ混黒褐色土。 ↓ 増加。やや軟。
- VI : 御池ボラ。 粒径2~30mm
- VII : 黒色土 (7.5YR1.7/1)。軟質。
- VII-1 : 二次アカホヤ。やや軟質。
- VII-2 : アカホヤ (10YR6/8~7/8)。
- VII-3 : アカホヤ。軽石状。
- IX : 黒色土。硬質。牛の脛ローム混。
- X : 黒色土。やや軟。パミス混。
- XI : 黒褐色土(10YR2/3)。やや軟。パミス混。
- XII-1 : 黒褐色土(10YR2/3)。やや軟。白・黄色のパミス小量混。
- XII-2 : 暗褐色土(10YR3/4)。やや軟。白・黄色のパミス混。
- XIII : にぶい黄褐色土(10YR5/3)。硬質。サツマ混。白・黄色

のパミス多量混。

XV：褐色土(10YR4/4)。やや軟。白色パミス少量混。

XV：褐色土(10YR4/6)。硬質。

XVI：黒褐色土(10YR3/2)。硬質。

XVII：褐色土(10YR4/6)。硬質。丸みを帯びた小礫混。

XVIII：二次シラス。

遺物包含層は第Ⅲ～Ⅴ層で、縄文後・晩期から近世までの遺物が出土している。遺物は第Ⅲ層から上で古代・中近世、第Ⅳ・Ⅴ層から縄文後・晩期、弥生から古墳時代のものが混在して出土する。遺構検出は主に第Ⅳ層と第Ⅵ層上面で行った。第Ⅱ層の文明白ボラは15世紀後半に降下したとされる板島起源の軽石で、耕作による攪乱を受けほとんど残っていない。



第4図 遺跡周辺地形図 (S=1/5,000)

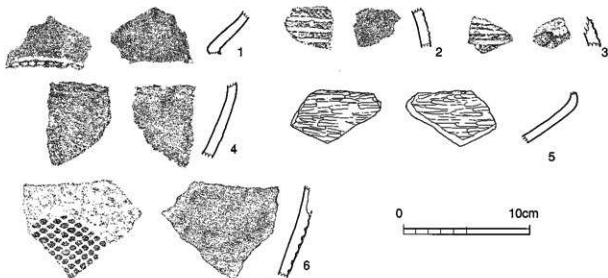
### 第3節 1区の調査

1区は10m幅で東西に約340m延びる主幹線道部分と西側の建物部分の約5,410㎡である。遺構検出は第IV層上面と第VI層上面で行い、土坑19基、掘立柱建物跡2棟、柱穴群が確認された。東側の遺物包含層はかなり削平されていたため、遺物の集中は西側に見られる。遺物は縄文後・晩期、弥生～古墳時代の土器、古代～中近世の遺物等が若干出土している。遺構は東側と西側に集中し、中央部分には確認されなかった。下層確認を第VI層の御池ボラ以下約4mの二次シラス面まで行ったが、遺構、遺物の確認はできなかった。

#### 1. 縄文時代の遺物

遺物の集中はみられないが、U6・U8・U11・R12・R38グリッドの第IV層および第V層から縄文後期から晩期の土器がわずかに出土している。遺構は確認されていない。

出土遺物は第5図に示している。1～3は西平式土器である。1は深鉢の口辺部から頸部で、頸部には棒状工具による連続刺突が施され、外器面はナデ、内器面は丁寧なナデ調整が見られる。2と3は深鉢の胴部で、横方向の沈線文とその中に磨消縄文が施されている。4は深鉢の胴部中位から下位と思われる。内外器面ともナデである。5は浅鉢の胴部と思われる。内外器面とも丁寧な横方向のミガキで仕上げられている。6は外器面に菱形の編目を持ち、結節の小さい投網瓦痕のある組織痕土器である。内器面は丁寧なナデ仕上げである。

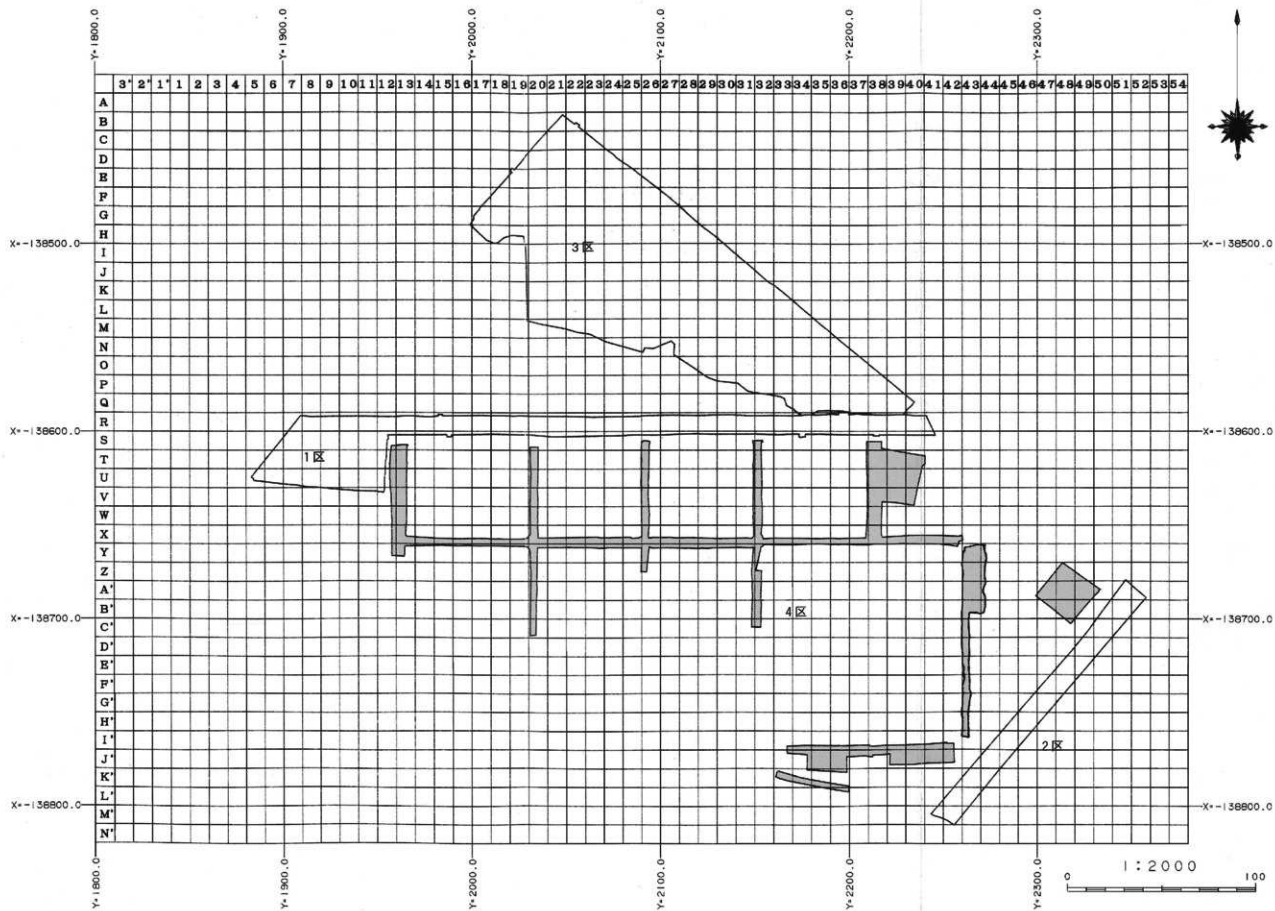


第5図 1区出土縄文時代の土器実測図 (S=1/3)

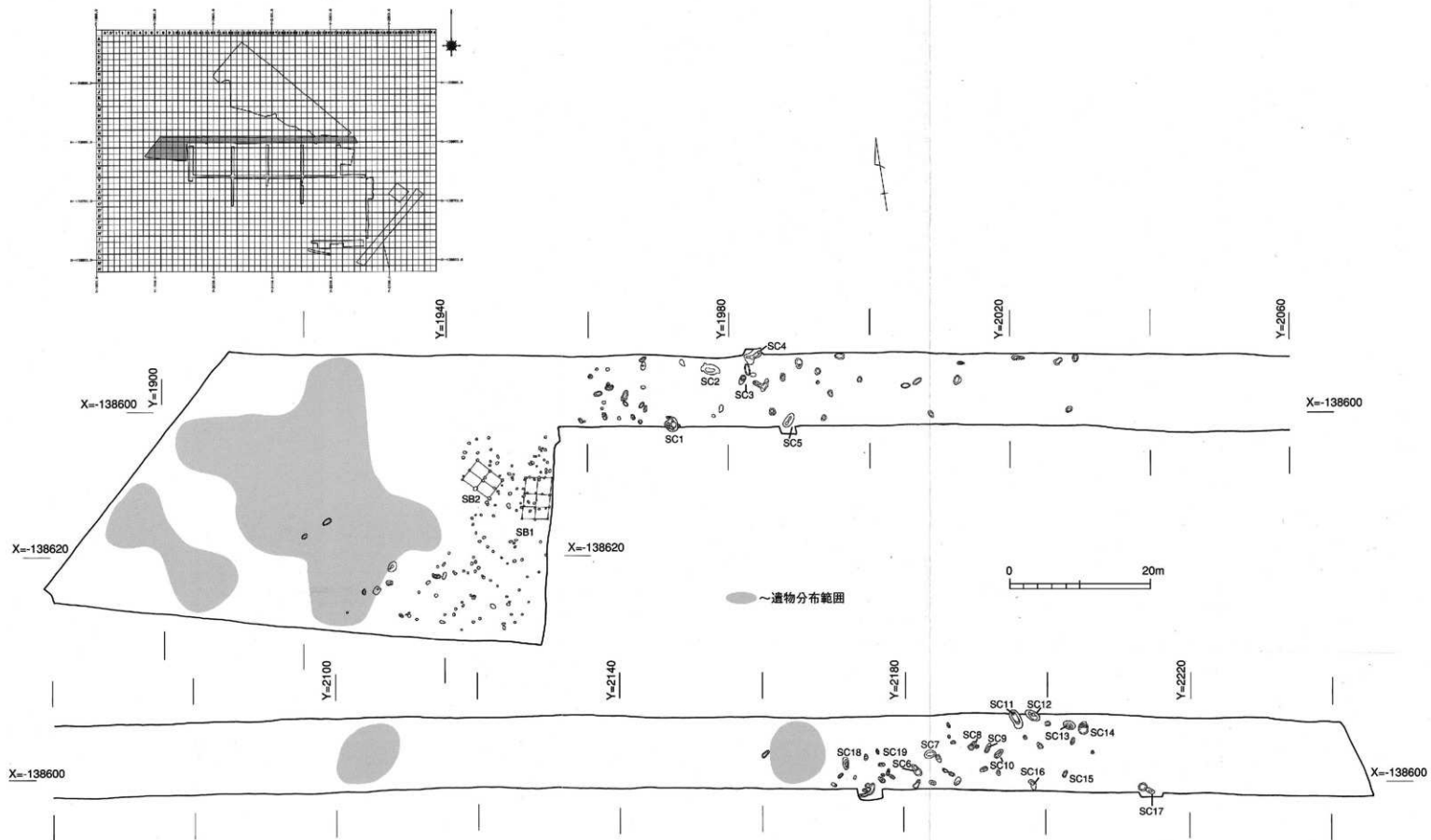
#### 2. 弥生および古墳時代の遺物

量的に遺物の集中は見られないが、調査区の西側 (R8～9・S7～9・T6～10・U6～9グリッド) から出土した遺物がほとんどである。遺物は第Ⅲ～V層から出土しており、同一個体でかなり移動しているものもあり、遺物包含層に安定した状況は見られない。遺構は確認されていない。

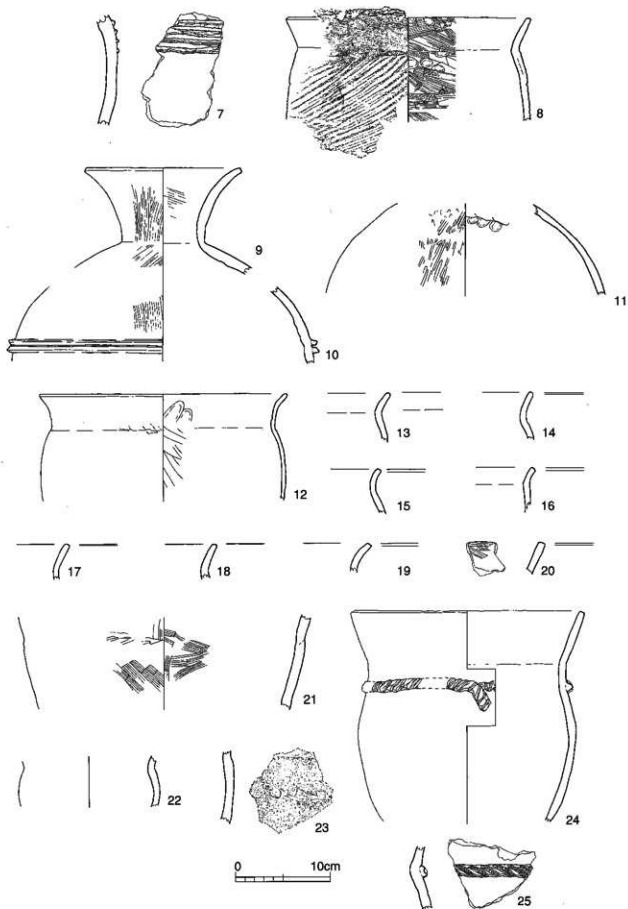
出土遺物は第8・9図に示している。7～11は弥生土器である。7は甕の胴部で、丸みをもった胴部



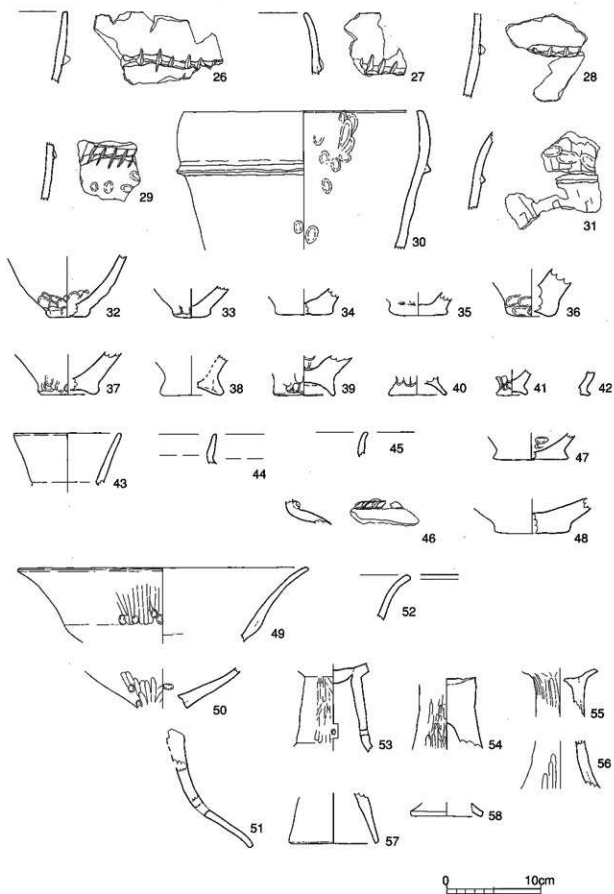
第6図 牧の原第2遺跡グリッド点配置及び調査区位置図 (S=1/2,000)



第7図 1区遺構・遺物分布図 (S=1/500)



第8図 1区出土弥生～古墳時代の土器実測図 (S=1/4)



第9図 1区出土弥生～古墳時代の土器実測図 (S=1/4)



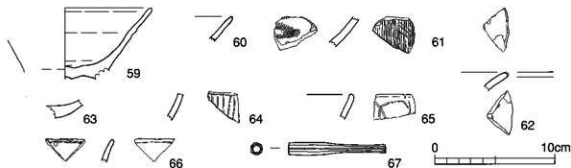
はやや内湾気味にのび、外側に開く短い口縁部との間に若干のくびれをもつ器形を呈するものと思われる。胴部上位に4本の断面三角形の貼付突帯が巡らされている。外器面は工具による縦方向のナデ、内器面は丁寧なナデで、両器面ともススが付着している。8は甕である。口唇部は平坦で、頸部が「く」字形に屈曲する。口縁部外面と内器面は斜方向のハケ目調整が見られ、胴部外面には斜方向のタキギが施されている。外器面にはススが付着している。9~11は壺である。9と10は同一個体である。偏球形の胴部を持ち、頸部は胴部最大径のおよそ1/3を測る頸部くびれ部から外反しながら口縁部までのびる。口唇部は平坦に仕上げている。胴部最大径のやや上方に2本の断面三角形の貼付突帯が巡る。外器面は縦・斜方向のハケ目、頸部から口縁部の内面に斜方向のハケ目調整が見られる。11は扁球形の胴部を呈する壺と思われる。外器面は縦方向のミガキ、内器面はハケ状工具による横方向のナデ調整が見られる。12~58は上器帯である。12~20は甕の口縁部から胴部である。12は口縁部径と胴部最大径がほぼ同じで、胴部上位に膨らみを持ち、緩やかにくびれをもって口縁部は外反する。口唇部は平坦で、口縁部外面は縦方向の工具ナデの後横方向のナデ、胴部外面と内器面はナデ調整が見られる。外器面全体にはススが付着している。13~15は胴部上位に膨らみを持つものと思われる。頸部が緩やかに屈曲し、口唇部は丸く仕上げられている。内外器面ともナデである。16は口縁部径が胴部最大径よりわずかに大きくなる甕で、頸部くびれ部内面に明瞭な稜を持つ。口唇部は平坦で、内外器面とも横方向のナデ調整である。17~19は口唇部は平坦で、頸部が緩やかにくびれている。17と18は外器面にススが付着している。20は口唇部が平坦に仕上げられ、内器面に工具によるナデ調整が見られる。21は甕の口辺部から胴部上位で、胴部は口辺部に向かって開き気味にのびている。内外器面とも工具による横・斜方向の粗いナデ調整が見られる。22は小型甕の頸部から胴部である。頸部は緩やかに屈曲している。内外器面ともナデで、外器面にはススが付着している。23は甕の頸部から胴部である。内器面は横・縦方向にハケ状工具によるナデ、外器面は粘土の垂れとナデが見られる。24~29は刻目の付いた貼付突帯を持つ甕である。24は口縁部に最大径をもつ甕である。胴部中位からやや上に胴部最大径を持ち、頸部に緩やかにくびれをもって口縁部は外側にまっすぐのびる。頸部くびれ部よりやや下位に刻目貼付突帯が巡る。内外器面ともナデで、外器面の口縁部から貼付突帯の下位までススが付着している。25は頸部くびれ部に刻目貼付突帯を持つ。刻目は布日圧痕が見られる。器面調整は内外ともナデである。26~28はくびれを持たない甕である。26は胴部から口辺部にかけてやや内湾気味に立ち上がり、口縁部はまっすぐのびる。器面調整は内外ともナデで、貼付突帯から上にススが付着している。27は口縁部が内湾する。器面調整は内外ともナデで、内器面に炭化物が付着している。28は口縁部がまっすぐのびるものと思われる。器面調整は内外ともナデである。29はくびれを持たずに口縁部がまっすぐ及び内湾気味になるものと思われる。器面調整は内外ともナデである。30と31は貼付突帯を持つ甕である。30は胴部が外側に向かつてのびるが、くびれを持たずに口辺部から口唇部にかけて内湾する。口唇部は平坦に仕上げられ、器面調整は内外ともナデである。31は明瞭なくびれを持たずに口縁部が外反する。外器面は工具による縦方向の粗いナデ、内器面は横方向のナデ調整である。32~39は甕の底部である。32~35は平底である。32は小さな底部で、くびれを持つ。内外器面とも著しい指頭痕が見られる。33と34は底部にくびれを持つが、裾部は広がらない。35は底部にくびれを持ち、裾部が若干外に開く。36~39は上げ底である。36は底部が厚く、内器面に炭化物が付着している。37は底部に若干のくびれを持ち、裾部は丸く仕上げている。38は底部にくびれを持ち、裾部が広がる。上げ底部は器壁が薄くなっている。39は著しい上げ底

で、裾は広がらず、裾端部はやや細く、丸く仕上げている。40～42は小型壺の底部と思われる。40と41は上げ底、42はやや上げ底になる。43～48は壺である。43は丸底を持つ壺の口縁部から頸部になると思われ、口縁部は外側に直口し、口唇部は細く仕上げている。器面調整は内外とも横ナデである。44は壺の口縁部から頸部で、口唇部を細く仕上げている。器面調整は内外ともナデである。45は壺の口縁部から頸部付近である。口唇部は平坦で、若干外側に粘土の反りが見られる。器面調整は内外ともナデである。46は頸部に刻目貼付突帯を持つ壺で、肩部が張る壺形を呈すると思われる。47と48は壺の底部で平底である。47は底部に明瞭なくびれを持ち、裾部は外側に広がる。48は緩やかなくびれを持ち、裾部は広がらない。49～56は高坏である。49～51は同一個体と思われる。坏部は坏底部との境にやや稜を持ち、外反しながら口縁部へとのびる。器面の風化が著しいが、内器面はナデ、外器面は縦方向のミガキが見られる。脚部は脚柱部と裾部との間に明瞭な境を持たずに広がるが、裾部はやや碗状に膨らむ。境には凹形の透かしが見られる。器面調整は内外ともナデである。52は坏部である。口縁部は外反し、口唇部は平坦に仕上げている。器面調整は内外ともナデである。53～56は脚柱部である。53は太い円柱状の脚柱部で、裾部との間に明瞭な稜を持つ。稜のやや上方に凹形の透かしが見られる。内器面はナデ、外器面は縦方向のミガキである。54は器壁の厚い、短い円柱状の脚柱部で、裾部が火きく開くものと思われる。内器面はナデ、外器面は縦方向のミガキである。55と56は同一個体と思われる。円柱状の脚柱部に開いた裾部が付くものと思われる。内器面はナデ、外器面は縦方向のミガキである。57と58は脚付き鉢などの脚部になると思われる。裾端部は平坦で、器面調整は内外ともナデである。

### 3. 古代および中・近世の遺物

高台付土師器環や青磁、染付けなどが第Ⅱ層下～第Ⅳ層からわずかに出土しただけである。遺物の集中などは見られないが、調査区の西側からそのほとんどが出土している。遺物を伴う遺構は確認されていない。

遺物は第10図に示している。59は高台付き坏で、体部から口縁部が外側にまっすぐのびる。内外器面とも横ナデである。60～65は青磁である。60は碗の口縁部である。中国青磁で、14世紀前後。61は碗の体部で、内外器面に佛描文が見られる。中国青磁で14世紀前後。62は皿の口縁部で、輪花口縁を呈する。中国青磁で、14世紀前後。63は碗の底部付近である。龍泉窯で、13～15世紀。64は碗の体部で、外器面に刻先蓮弁文が施されている。14～15世紀。65は鉢か碗の口縁部である。外器面にヘラ描文が見られる。15～16世紀。66は中国染付け碗の口縁部である。15～17世紀。67は銅製の煙管の吸い口で、調査区東側の第Ⅳ層から出土している。



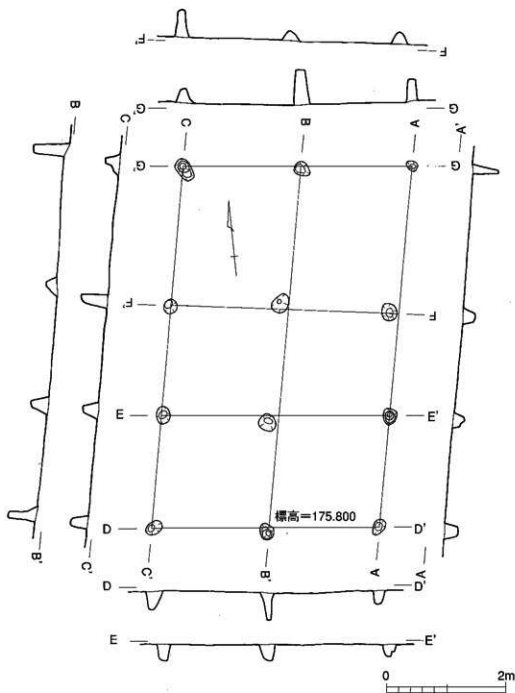
第10図 1区出土古代及び中・近世の遺物実測図 (S=1/3)

#### 4. 時期不明の遺構と遺物

遺構検出は第IV層上面と第VI層上面で行った。それぞれの面において土坑や柱穴などが確認されている。遺構に伴う遺物が全く出土しておらず、遺構埋土の火山物質に時期決定の手掛かりを求めるのみであったため、遺構年代を絞り込むことは不可能であった。ここではそれらの掘立柱建物跡と土坑について記述を行いたい。

#### 掘立柱建物跡 (SB)

1区で検出された掘立柱建物跡は2棟である。1区の中でも一番多く遺物が出土した調査区西側の第



第11図 1区SB1実測図 (S=1/60)

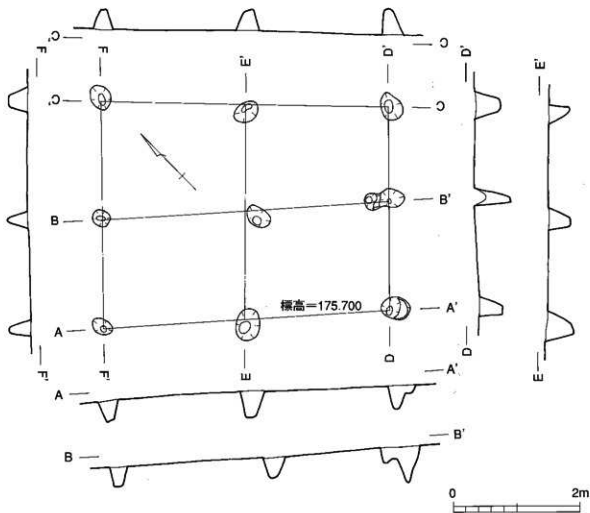
VI層（御池ボラ）上面で検出した。柱穴の時期は不明であるが、埋土は大きく御池ボラ混暗褐色土と御池ボラ混黒褐色土の2種類に分類できた。どちらにも第II層の明白ボラ（15世紀後半）の混入は見られなかったことから中世より前の遺構と推測される。

### SB1(第11図)

S・T・U12グリッドに検出され、主軸をN-10°-Eにとる。2間×3間の総柱建物で、梁行3.9m、桁行6.12・6.2mで、面積は23.4㎡を測る。柱穴の埋土は御池ボラを含んだ暗褐色土で、やや軟質である。柱穴は円形及び楕円形を呈し、柱穴径は20~30cmとやや小さく、深さ20~60cmである。

### SB2(第12図)

S・T11グリッドに検出され、主軸をN-45°-Wにとる。2間×2間の総柱建物で、梁行3.36・3.7m、桁行4.6mで、面積は15.6㎡を測る。柱穴の埋土は御池ボラを含んだ黒褐色土でやや固くしまっている。柱穴は円形及び楕円形を呈し、柱穴径は30~50cmで、深さ35~60cmである。



第12図 1区SB2実測図 (S=1/60)

## 土坑 (SC)

第IV層上面で検出を行い、東西に細長い調査区の東側を中心に19基確認した。規模・形態など様々で、その特徴によって幾つかのグループに分けられる。また、これらの土坑は3区や4区においても検出されているので、土坑全体の分類基準を提示し、分類に従って記述する。土坑計測値については、土坑計測表(1)・(2)を参考にしていきたい。土坑の時期については、文明白ボラの堆積している土坑については、堆積の状況から見て降灰時には遺構の落ち込みや凹みがあったと思われ中世の時期が考えられるが、出土遺物がなく、遺構の掘り込み面が明確でないことから断定はできない。また、用途についても不明であるが、SC1の埋土で植物球形体分析を行った結果、文明白ボラ堆積層直下からネザサ節やメダケ節が極めて多く確認されていることから、これらを何らかの目的で土坑内に集積していたことも考えられる。

土坑の分類基準は次の通りである。土坑は埋土に文明白ボラが堆積しているものとそうでないものとがある。文明白ボラが堆積しているものをI類、堆積していないものをII類とする。規模については長軸が2.50m以上のものを大型でA類、それ以下のものをB類とした。平面形態は楕円形(不定楕円形も含む)タイプを1類、円形(不定円形も含む)タイプを2類、不定形タイプを3類とする。当遺跡の土坑は底にピット(柱穴)状やそれより大きい穴の落ち込みを持つ特徴が見られる。よって、長軸片方にピット及び落ち込みを有するものをa類、長軸両方にピット及び落ち込みを有するものをb類、中央または中央付近にピット及び落ち込みを有するものをc類、中央と縁際にピット及び落ち込みを有するものをd類、壁際にピット及び落ち込みを有するものをe類、その他をf類とする。

I-A-1-a類・・・SC11(第15図)

I-B-1-a類・・・SC6(第14図)

I-A-3-a類・・・SC4(第14図)

SC11はR36グリッド、SC6はR35グリッド、SC4はR15グリッドに位置する。SC11とSC6は規模は異なるが、楕円形プランを呈し、長軸の片方にピットもしくは落ち込みを持つもので、いわゆるハイヒール状を呈した土坑である。また、SC4は不定形プランで長軸の片方にピットを持つ。

I-B-1-c類・・・SC3(第14図)、SC12(第15図)

SC3はR15グリッド、SC12はR36グリッドに位置する。楕円形プランで、中央にピットや落ち込みを持つもので、本遺跡で特徴的な土坑の一つである。

I-B-1-d類・・・SC13(第15図)

SC13はR37グリッドに位置する。楕円形プランを呈し、長軸の片方と中央にピットを持つ。

I-A-1-f類・・・SC2(第14図)

I-B-1-f類・・・SC5(第14図)、SC7(第15図)、SC15・SC19(第16図)

SC2はR14グリッド、SC5はS15グリッド、SC7はR35グリッド、SC15はR37グリッド、SC19はグリッドに位置する。底にピットや落ち込みを持たない楕円形プランの土坑である。1区に多いタイプである。

I-B-2-c類・・・SC14(第16図)

SC14はR37グリッドに位置する。不定形プランで、中央付近に落ち込みを持つものである。

I-B-3-e類・・・SC1(第14図)

SC1はS14グリッドに位置する。不定形プランを呈し、実際にピットを持つ。

II-B-1-c類・・・SC8 (第15図)

SC8はR35・36グリッドに位置する。埋土は御池ボラ混黒色土と御池ボラ混黒褐色土がレンズ状に堆積し、表面に文明白ボラが点在するように若干見られる。楕円形プランで、中央にピットを持つ土坑である。

II-B-1-f類・・・SC9・SC10 (第15図)、SC16・SC17・SC18 (第16図)

SC9とSC10はR36グリッド、SC16はS36グリッド、SC17はS38グリッド、SC18はR34グリッドに位置する。土坑プランは楕円形で底面に何も持たないものである。埋土は御池ボラ混黒色土や御池ボラ混黒褐色土のレンズ状堆積で、表面に文明白ボラがわずかに点在している。I-B-1-f類と同じく確認数の多い土坑で、文明白ボラの堆積の違いには若干の時期差があると思われる。

1区 SC3

175.900m



1区 SC3

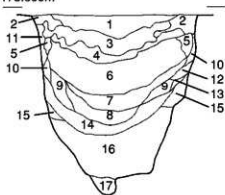
1. 褐灰色土～文明白ボラを含む。
2. 文明白ボラ層
3. 黒褐色土～御池ボラを含む。
4. 3層より明るい黒褐色土～御池ボラを含む。

3区 SC22

1. 黒色土～硬質。御池ボラと文明白ボラを多量に含む。
2. 黒色土～しまりあり。御池ボラと文明白ボラ細粒子を若干含む。
3. 暗褐色土～しまりあり。御池ボラと文明白ボラを若干含む。
4. 暗黄灰色土～しまりあり。文明白ボラ細粒子。
5. 暗褐色土～しまりあり。文明白ボラ細粒子を若干含む。
6. 黒色土～しまりあり。御池ボラ文明白ボラを若干含む。
7. 黒褐色土～軟質。御池ボラを若干含む、若干粘性あり。
8. 黒褐色土～軟質。7層より御池ボラを多量に含む。粘性あり。
9. 黒色土～軟質。御池ボラ細粒子をわずかに含む。粘性あり。
10. 黒色土～軟質。9層より若干柔らかい。
11. 黒褐色土～やや軟質。御池ボラを含む。
12. 黒色土～非常に軟質。御池ボラを若干含む。粘性あり。
13. 黒色土～非常に軟質。12層より御池ボラを多量に含む。
14. 黒褐色土～軟質。御池ボラ細粒子を若干含む。
15. 明黄褐色土～御池ボラ層。もろく崩れやすい。
16. 黒褐色土混御池ボラ層～もろい。
17. 黒色土～軟質で粘性あり。御池ボラをわずかに含む。

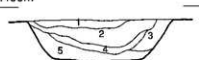
3区 SC22

175.600m



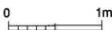
1区 SC9

175.400m

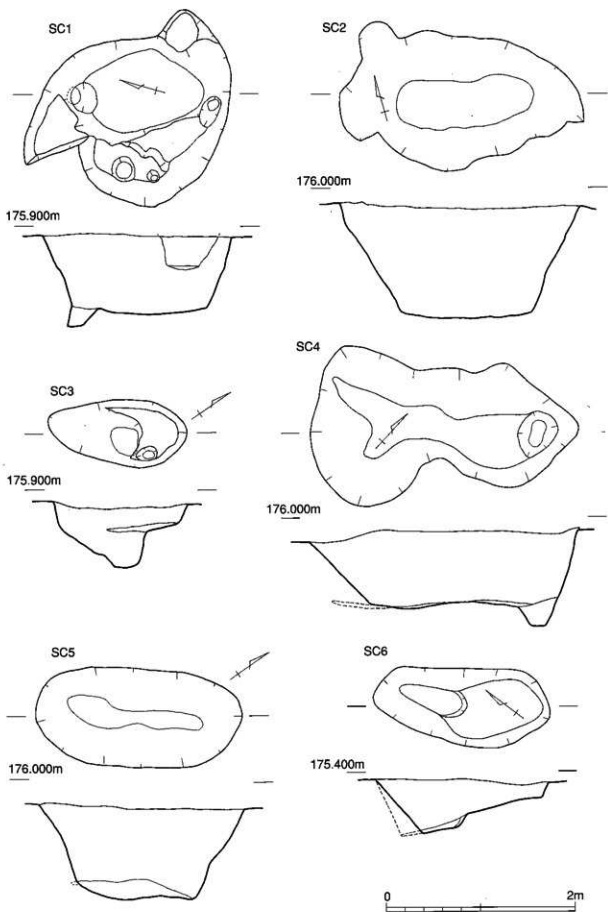


1区 SC9

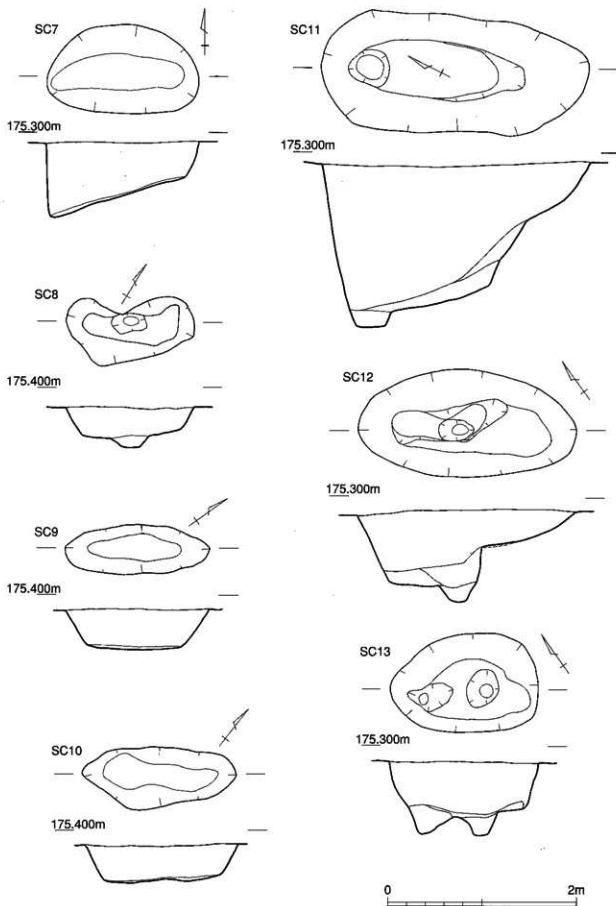
1. 黒灰色土～文明白ボラを若干含む。
2. 黒色土～御池ボラを少量含む。
3. 暗褐色土～御池ボラを中量含む。
4. 黒褐色土～御池ボラを中量含む。
5. 黒褐色土～御池ボラを多量含む。



第13図 土坑土層断面実測図 (S=1/40)

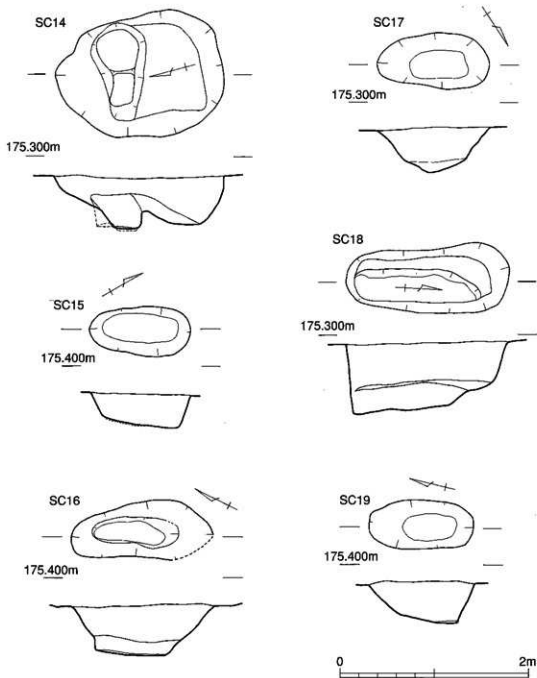


第14图 1区SC1~6实测图 (S=1/40)



第15图 1区SC7~13实测图 (S=1/40)

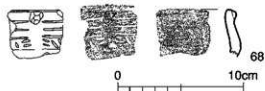




第16図 1区SC14~19実測図 (S=1/40)

遺構外出土の遺物 (第17図)

68はR11グリッドの第IV層から出土している。器形的には鉢形を呈すると思われる。口縁部外面対になる横・斜方向の短沈線文と口縁端部には円形の突起が施されている



第17図 1区出土時期不明の土器実測図 (S=1/3)

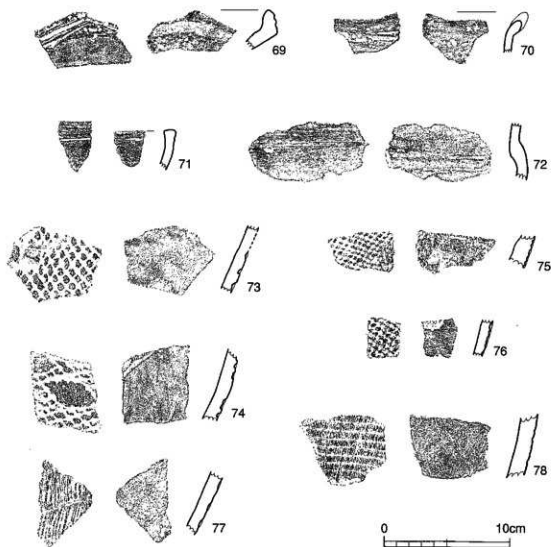
## 第4節 2区の調査

2区は東側端に位置する、幅14mで北東—南西方向に約160m延びる主幹線道部分の約1,990㎡ある。地形は北東から南西側の谷に向かって低くなっている。遺構は御池ボラ上面で検出した溝状遺構1条だけで、縄文後期・晩期を中心とした遺物が谷側に集中して出土している。

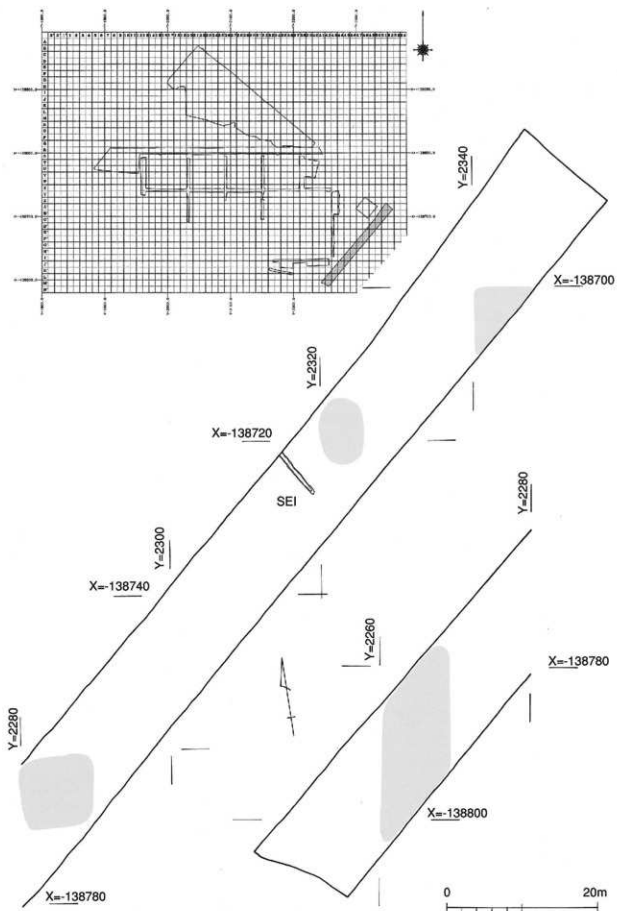
### 1. 縄文時代の遺物

調査区南西側の丘陵地縁辺部に遺物の集中が見られた。I'45・I'46・L'42・M'41・M'42グリッドの第IV層および第V層から縄文後・晩期の土器が出土しており、特に組織痕土器が多く見られる。遺構は確認されていない。

出土物は第18図に示している。69は西平式土器で、深鉢の口縁部である。「く」字形に折れ曲がった山形口縁頂部で、2本の沈線と同端刺突止まりの短沈線と磨消縄文が施されている。70は黒川式土器の



第18図 2区出土縄文時代の土器実測図 (S=1/3)



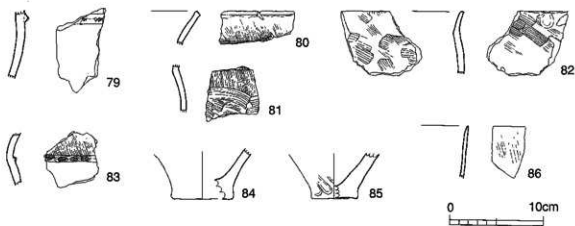
第19図 2区遺構・遺物分布図 (S=1/500)

浅鉢の口縁から頸部と思われる。口縁にヒレ状突起をもち、内器面は丁寧なナデ、外器面は丁寧なナデおよび一部横方向のミガキも見られる。71は鉢の口縁部と思われる。内外器面とも丁寧なナデおよび横方向のミガキで仕上げられている。口縁部外面に1本の沈線が施され、口唇部はやや平坦に仕上げられている。72は深鉢の頸部付近である。外器面は横方向の丁寧なナデとミガキ、内器面は横方向のナデ仕上げである。73~78は組織痕土器である。型取り技法でつくられた土器であるが、外器面の圧痕は3種類の素材に分類できる。73と74は菱形の編目を持ち、結節の小さい投網圧痕が見られる。内器面は丁寧なナデである。75と76は菱形の編目を持つが、編目が小さく結節が瘤のように大きい担袋圧痕である。内器面はナデである。77と78は編布圧痕で、簾状の圧痕が見られる。内器面はナデである。

## 2. 弥生および古墳時代の遺物

遺物は第IV層から出土しているが、まともは見られない。3区の西側の土器と同一個体のものも確認されており、遺物の移動が見られる。

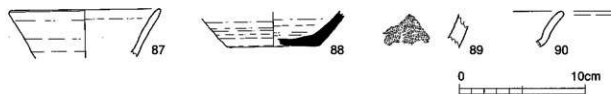
遺物は第20図に示している。79は弥生土器である。79は内湾する胴部の甕で、胴部上位に1本の刻目貼付突帯を持つ。器面調整は内外ともナデである。80~86は土師器である。80~85は甕である。80と81は同一個体と思われる。頸部に緩やかにくびれを持ち、口唇部は平坦に仕上げている。器面調整は内器面は横方向のナデ、外器面は口縁部から頸部は縦方向のハケ目、頸部下は横方向のハケ目が見られる。頸部にはスカが付着している。82は甕の口縁部から胴部である。頸部は緩やかにくびれ、頸部内面に稜を持つ。口唇部は平坦である。器面調整は内外器面とも斜方向のハケ目である。83は頸部に刻目貼付突帯を持つ甕である。刻目には布目圧痕が見られる。器面調整は内面は横・斜方向のハケ目、外器面は口唇部は縦方向のハケ目、胴部はナデである。84と85は甕の底部である。84は平底で内器面にスカが付着している。85は平底で、外器面に指頭痕が見られる。86は長頸壺の口縁部である。口唇部は細く仕上げ、器面調整は内外ともナデである。



第20図 2区出土弥生~古墳時代の土器実測図 (S=1/4)

### 3. 古代および中世の遺物

土師器環、須恵器環、布痕土器、青磁が第Ⅱ層下と第Ⅳ層からわずかに出土している。遺物は第21図に示している。87は土師器環の口縁部から体部である。88は須恵器環の底部と思われる。内外器面ともナアで、底部はへら切りの後、指ナアが見られる。89は布痕土器である。90は中国青磁小皿の口縁部である。龍泉窯で、14～15世紀。



第21図 2区出土古代および中世の遺物実測図 (S=1/3)

### 4. 時期不明の遺構

#### 溝状遺構 (SE)

##### SE1

2区中央寄りのF'48グリッドの第Ⅵ層上面で検出した。南南東から北北西方向に走る。南南東側は高くなっているため遺構は浅くなり終焉している。また、北北西側も調査区外に更に延びる可能性がある。SE1は第Ⅳ層から掘り込まれており、長さ7m、幅0.6～1m、深さ10～25cmを測る。埋土は御池ボラと文明白ボラが若干混在する黒色土で、遺構上面に文明白ボラの堆積層(第Ⅱ層)があることから中世以前の溝と推測されるが断定できない。遺物は出土していない。

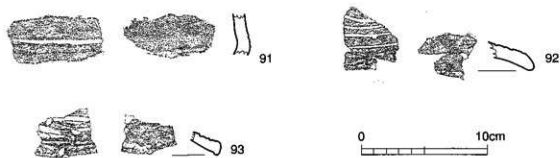
## 第5節 3区の調査

3区は北側の管理棟部分と駐車場部分の約11,790㎡である。遺構検出は第Ⅳ層上面と第Ⅵ層上面で行い、塹穴住居跡2基、土坑23基、柱穴群、溝状遺構1条、畝状遺構が確認されている。南東側では遺物包含層の第Ⅳ層はほとんど削平されている。時間の都合上、第Ⅳ層から下は部分的な確認となった。弥生中期中葉から後期を中心とした遺物が出土している。

### 1. 縄文時代の遺物

H28・I26・O30グリッドの第Ⅳ層から縄文後期から晩期の上器がわずかに出土している。遺構は確認されていない。

出土土器は第22図に示している。91は深鉢の胴部で、胴部がやや屈曲して肩部を成す器形を呈すると思われる。屈曲する肩部に1本の沈線が施されている。内外器面とも丁寧なナア仕上げである。92と93は台付鉢などの脚台の裾部と思われる。外器面に横方向の沈線が施され、内外器面ともナア仕上げである。

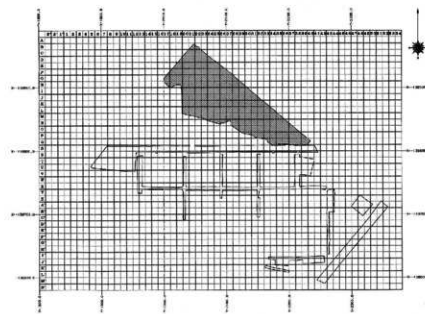
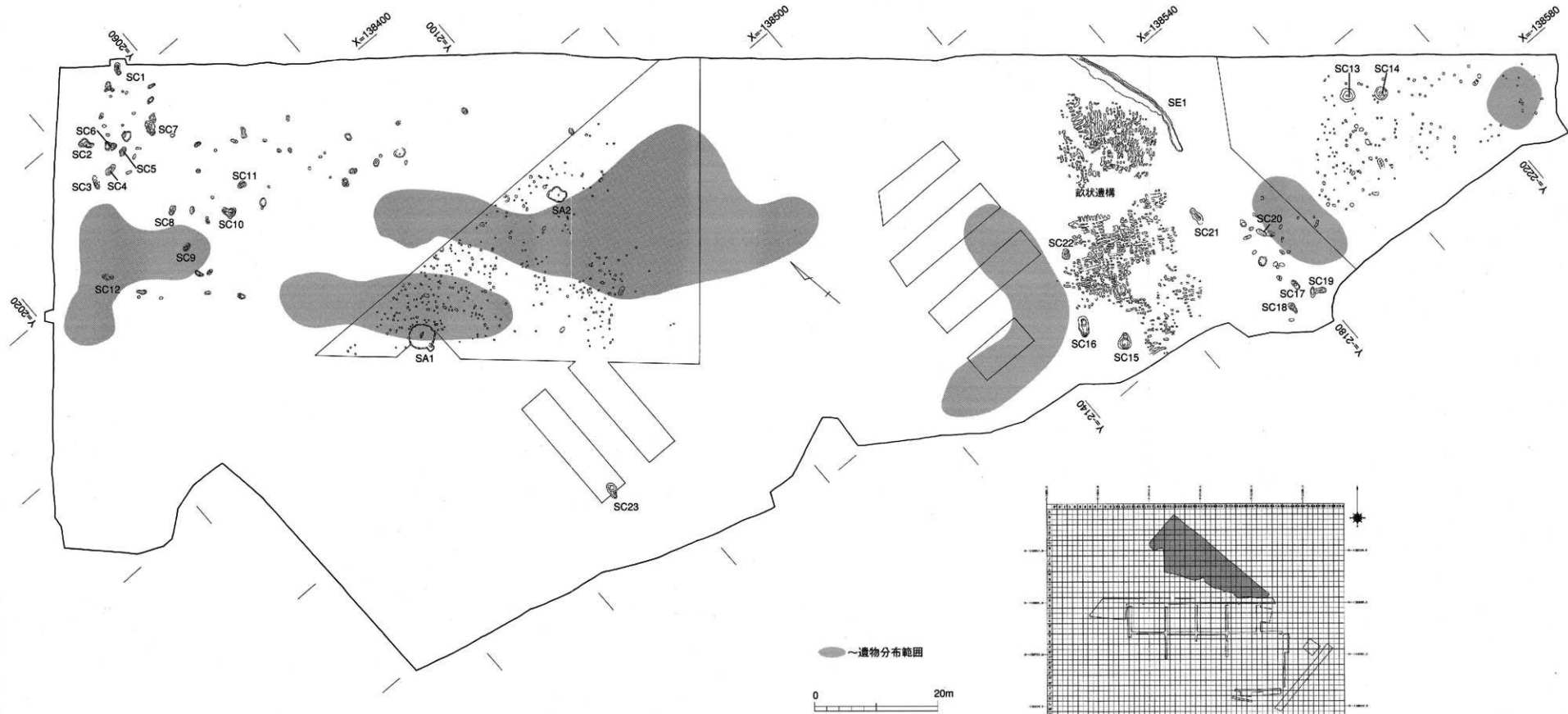


第22図 3区出土縄文時代の土器実測図 (S=1/3)

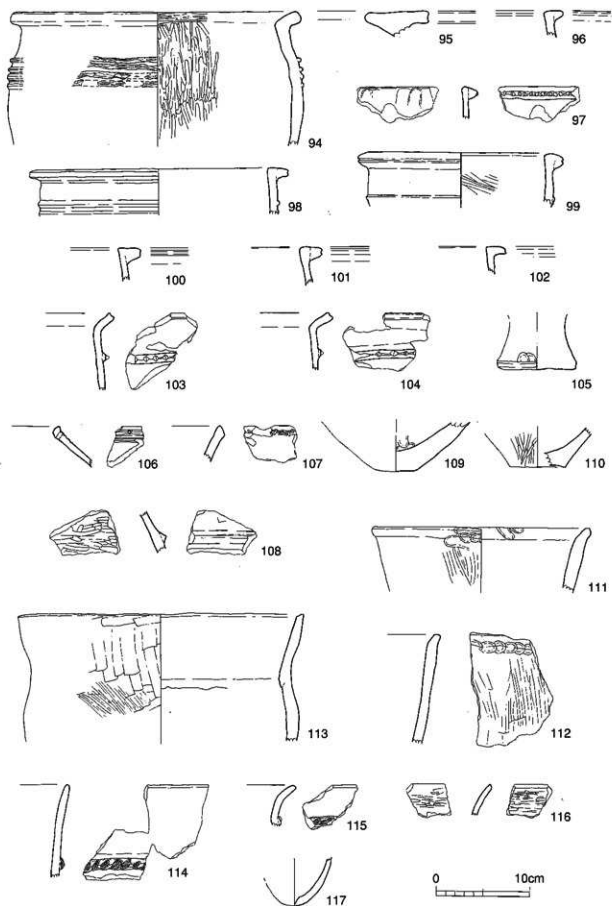
## 2. 弥生および古墳時代の遺物

遺物に集中は見られず、第IV・V層からまばらに出土しただけであった。

遺物は第24図に示している。94～110は弥生土器である。94～105は甕である。94は丸みを持った胴部は内湾気味にのび、その端部に断面長方形の突帯を貼り付け、口縁部を形成している。胴部には4本の突帯が巡らされている。内器面の口縁部は横方向の丁寧なミガキ、胴部は縦方向の丁寧なミガキ、外器面は丁寧なナデで仕上げられている。外器面にはススが付着している。95は大型甕の口縁部である。鋤先状を呈する口縁である。器面調整は内外とも丁寧なナデである。96は口縁部に断面三角形の突帯を貼り付けている。突帯端部には凹線が見られる。器面調整は内外ともナデで、外面にはススが付着している。97は器壁の薄い胴部の甕で、口縁部に断面三角形の突帯を貼り付けている。突帯の端部には刻目が施されている。98は口縁部に断面台形状の突帯を貼り付けている。突帯端部には凹線、胴部には2本の突帯が巡らされている。内外器面とも丁寧なナデ仕上げで、外器面にはススが付着している。99は口縁部に丸みを帯びた断面台形の突帯を貼り付けている。突帯端部には凹線、胴部には1本の突帯が見られる。内外器面ともナデ仕上げである。100と101は口縁部に断面台形の突帯を貼り付けている。突帯端部には凹線が見られる。102は薄手の器壁に断面長方形の突帯を貼り付けている。突帯端部には凹線がある。103と104は同じタイプの甕である。口縁部が「く」字形に外反し、口唇部に凹線と胴部上位に刻目の付いた突帯が巡る。器面調整は内外ともナデで、外面にはススが付着している。105は脚台付き甕の脚台部である。平底で、やや楕円がりである。裾端部には凹線が見られる。106～110は壺である。106は瀬戸内系の無頸壺である。胴部が張り、口縁部下に4本の凹線と円形の穿孔が見られる。内外器面ともナデで、外器面にはススが付着している。107は複合口縁系の壺で、風化が著しいが、口縁外面に櫛波状文が見られる。内外器面ともナデである。108は壺の胴部付近と思われる。胴部に断面三角形の突帯が巡らされている。内器面は横方向のミガキ、外器面はナデである。109と110は壺の底部である。109は小さな平底を呈する。内外面ともナデである。110は若干上げ底を呈する。内器面はナデ、外器面は縦方向のミガキである。111～117は土師器である。111と112は同一個体の甕と思われる。胴部がやや開き気味にまっすぐのび、口縁部は外反する。内器面はナデ、外器面は縦方向のハケ状工具によるナデである。口縁部外面に指頭痕が見られ、外器面にはススが付着している。113は頸部に緩やかなくびれを持ち、口縁部径と胴部最大径がほぼ同じ大きさの甕である。内器面はナデ、外器面はハケ状工具による縦・横方向の粗いナデである。114と115は刻目貼付突帯を持つ甕である。114はくびれを持たない甕で、口縁部下8cmに布日匠



第23図 3区遺構・遺物分布図 (S=1/500)



第24図 3区出土弥生～古墳時代の土器実測図 (S=1/4)



痕を持つ刻目突帯が巡る。内外器面ともナデである。115は口縁部が外反し、くびれ部に布目圧痕を持つ刻目突帯が巡る。116は高環の環口縁部である。口縁部は外反し、口唇部は外側に稜を持ちシャープに仕上げている。内外器面とも横方向のミガキである。117は小型環か。丸底を呈する。

### 3. 古代および中世の遺構と遺物

3区では、第Ⅲ層上面で15世紀後半以降に降下したとされる文明白ボラを埋土に持つ畝状遺構や土坑が確認されている。畝状遺構は文明白ボラ降下前後の畑跡として中世に位置付けられるが、土坑については、遺構の性格や遺構の掘り込まれた層位が不明であること、また、無遺物であることから時期不明遺構とした。畝状遺構は調査区東側の約580㎡に検出された。

遺物はわずかであるが、土師器の環や皿が出土している。

#### 畝状遺構 (第25図)

畝状遺構は3区東側のN~P32・M~P33・M34・N34グリッドの第Ⅲ層上面で検出した。畝状遺構は第Ⅲ層の黒褐色土に第Ⅱ層の文明白ボラが並行する小溝状として確認されている。後世の耕作による削平のため遺存状況は良好でない、遺構の広がりや区画(単位)については不明瞭である。畝状遺構は文明白ボラの筋のない部分によって大きく2区画に分けられる。一つは、北東部に北東-南西に走行する単位があり、一部西北西-東南東に走行する単位も見られる。約200㎡の広がりがある。二つ目は南西部に北東部の単位とは若干主軸の異なる北東-南西に走行する単位と、それと直交する北西-南東方向の単位が見られる。約380㎡である。小溝の幅は30~40cm、深さ5~12cm、小溝間の幅は10~20cmである。小溝の長さは途切れていて一様ではないが、2~4m程を測る。小溝の埋土は一次堆積の文明白ボラではなく、下層土ブロックの混入した攪拌土である。栽培作物については、植物珪酸体分析の結果、トレンチ1(土層断面A-A'、B-B')の小溝間からイネが検出されている。

出土遺物は第27図の120である。土師器の環か皿の底部で、糸切り底を呈する。

#### 遺構外出土の遺物

土師器環や皿が第Ⅲ・Ⅳ層からわずかに出土している。遺物は第27図に示している。118は土師器皿で、底径約10cmとやや大きい皿である。へら切り底である。119は土師器環で、へら切り底を呈する。

### 4. 時期不明の遺構と遺物

ここで記述する遺構については、遺構形態や埋土の状況からみてある程度時期の推定はできるが、決定要因となる遺物の出土状況がないことから時期不明の遺構としている。遺構は、第Ⅲ層上面で検出した土坑23基、溝状遺構1条、第Ⅴ・Ⅵ(御池ボラ)層上面で検出した竅穴住居跡2基、柱穴群がある。

#### 竅穴住居跡(SA)

##### SA1(第28図)

I23グリッドの第Ⅴ層面から検出した。直径4~4.3mのほぼ円形プランを呈し、検出面からの床面の深さは15~25cm、床面積は12㎡を測る。主柱穴は中央寄りの2本で、その間には炭化物を含んだ埋土の凹

みがある。主柱穴径は30~40cm、深さ55~70cm、中央の凹みは長軸55cm、短軸35cm、深さ0.5cmである。また、壁際には径が10cm程、深さ20~30cmの小ピットが14個確認された。小ピットの掘り込みは住居の中心に向かって斜めに入っている。床面は御池ボラまで掘り込まれ、硬化面が確認されている。出土遺物は床直上のは砂岩製の砥石（遺物：123）だけで、あとは埋土の第1層から弥生中期後葉~後期初頭に位置づけられる瀬戸内系の土器（遺物：121・122）や貝殻条痕の施された縄文土器が数点出土している。

出土遺物は第29図に示している。121と122は胴部の張った器形を呈する無頸壺である。121は口縁部で、口縁部下に4本の凹線が走り、円形の穿孔が見られる。内外器面ともナデで、外器面にはススが附着している。122は胴部に当たる部分と思われる。外器面に縦方向の短沈線（刺突）が施されている。内外器面ともナデである。123は砥石で、石材は砂岩である。両面及び右側面に著しい擦痕と上下側面に敲打痕が見られる。

### SA2（第30図）

H26グリッドの第VI層（御池ボラ）上面で検出した。長軸約2.9m、短軸約2.1mの不定形プランを呈し、検出面から床面までの深さ10cm、床面積は4.4mを測る。主柱穴は中央に1本で、径が20~30cm、深さ30cmである。SA1ほど明確ではないが、壁際には径が10cm、深さ10cmの小ピットが8個確認されている。御池ボラが床面になるが、硬化面は中央に一部見られる。遺物は出土していない。

### 土坑（SC）

第IV層上面で検出しているものがほとんどであるが、調査区の東側においては地形が高くなり、耕作による削平がかなり及んでいたため、第VI層（御池ボラ）上面での検出となった。土坑は調査区の北西と南東に分布の中心があり、総数23基確認された。全ての土坑埋土に文明白ボラの堆積が見られる。規模・形態ともに様々で、1区と同じく分類基準に従って記述する。計測値については土坑計測表(1)・(2)を参考にしていただきたい。

I-A-1-a類・・・SC21（第34図）

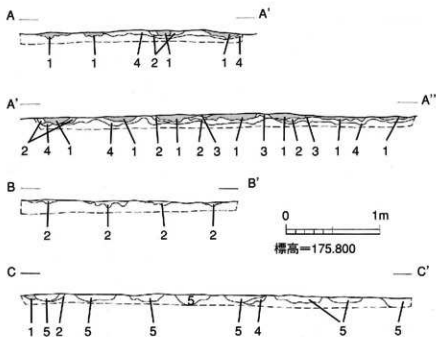
I-B-1-a類・・・SC1・SC4（第31図）、SC8・SC9（第32図）、SC19（第34図） SC21はO33グリッド、SC1はB22グリッド、SC4はC21グリッド、SC8はD・E21グリッド、SC9はE21グリッド、SC19はQ34・35グリッドに位置する。楕円形プランを呈し、長軸の片方にピットを持つものである。長軸が1.5~2mと比較的大きさが同じで、3区に一番多く見られるタイプである。埋土は御池ボラ混黒褐色土や御池ボラ混暗褐色土のレンズ状堆積で、土坑中心部の最上層に文明白ボラ層がある。文明白ボラは10~15cm程の厚さでレンズ状に堆積している。白ボラには黒褐色土ブロックが混在している。

I-A-1-b類・・・SC16（第34図）

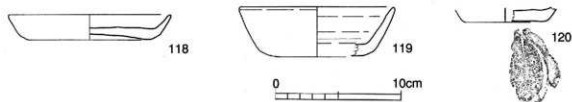
SC16はO31グリッドに位置する。大型の土坑で、埋土に文明白ボラが2層に分かれて堆積している。底部の埋土は御池ボラ混黒褐色土、中層は一次堆積と思われる文明白ボラ層、その上に黒色土、二次堆積と思われる黒褐色土ブロック混白ボラとなる。SC16では寄生虫卵分析を行った。検出された花粉の組成から調査区周辺にはヨモギ属、タンポポ属科、キク科、イネ科、シダ類などの草木が生育してい



第25图 3区欹状遺構実測図 (S=1/200)



第26図 3区畝状遺構土層断面実測図 (S=1/40)



第27図 3区出土土器実測図 (S=1/3)

1. 文明白ボラ～非常に硬くしまっている。
2. 暗褐色土～硬質でしまりあり。文明白ボラと4層が混在している。
3. 黒色土～硬質でしまりあり。文明白ボラ粒子を若干含む。
4. 暗褐色土～硬質でしまりあり。文明白ボラ細粒子を若干含む。
5. 暗褐色土～硬質でしまりあり。溝の底面や壁に文明白ボラの堆積が見られる。

たとえられ、周辺にはクリーシイ属—マテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属などで構成される森林が分布していたものと推定される。寄生虫卵および明らかな消化残渣が検出されないことから、糞便が入られていた可能性は考えにくい。

I-A-1-c類・・・SC7 (第32図)

I-B-1-c類・・・SC3 (第31図)、SC17・SC18 (第33図)

SC7はC22グリッド、SC3はC21グリッド、SC17と18はQ34グリッドに位置する。楕円形プランで、中央にピット及び落ち込みを持つものである。長軸の片方にピットを持つものと規模など類似している。埋土は下層に御池ボラ混黒褐色、御池ボラ混暗褐色土がレンズ状に堆積し、最上層中央部には文明白ボラがレンズ状に堆積している。

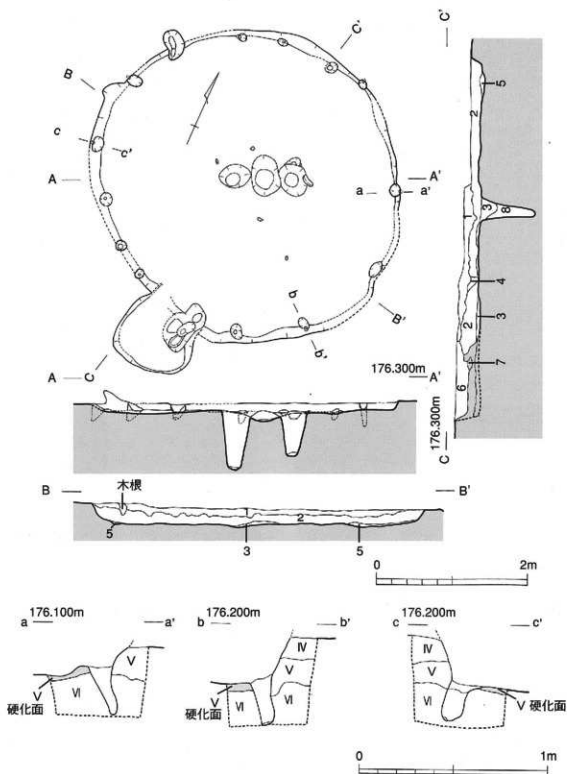
I-B-1-f類・・・SC5 (第31図)、SC12 (第32図)

SC5はC21グリッド、SC12はE20グリッドに位置する。

I-A-2-c類・・・SC13 (第33図)

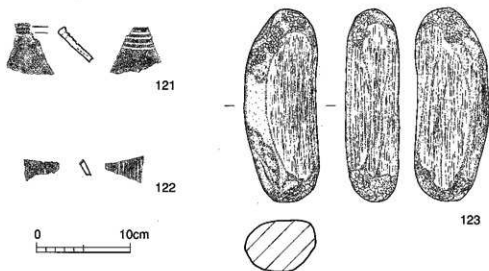
I-B-2-c類・・・SC11 (第32図)、SC22 (第35図)

SC13はO37グリッド、SC11はE22グリッド、SC22はN32グリッドに位置する。円形プランで中央にピットを有する。SC11の埋土は御池ボラ混暗褐色土で、攪拌されたような文明白ボラが表面にわずかに見えるだけである。SC13と22は埋土の中層に一次堆積と思われる文明白ボラがかなり厚く堆積している。



1. 暗褐色土～やや軟質。御池ボラを多量に含む。
2. 黒褐色土～1層よりしまりあり。御池ボラを多量に含み、若干粘性あり。
3. 黒色土～しまりあり。御池ボラをやや多く含む。やや粘性あり。
4. 褐色土～軟質。御池ボラを含む。
5. 暗褐色土～硬化層。御池ボラを多量に含む。
6. 褐色土～軟質。御池ボラを含む。
7. 黒褐色土～軟質。御池ボラを含む。
8. 黒褐色土～やや軟質。御池ボラをやや多く含む。やや粘性あり。

第28図 3区SA1および小ピット断面実測図 (S=1/50、小ピット：S=1/20)



第29図 3区SAI出土遺物実測図 (S=1/4)

I-A-2-d類・・・SC14・SC15 (第33図)

SC14はP37グリッド、SC15はO32グリッドに位置する。基本的にI-A-2-c類と同じである。大型の円形土坑で、底中央にピットが見られる。埋土は中層に一次堆積と思われる文明白ボラが見られる。SC15は上層断面でみると土坑が一度埋まった後、また同じ所を掘り直していることが窺われる。

I-B-3-a類・・・SC10 (第32図)

SC10はC21グリッドに位置する。SC10は2つの土坑が切り合っており、北北西-南南東方向に長軸を持つ楕円形の土坑が南北方向に長軸を持つ細長土坑より新しい。I-B-1-a類に分類してもよい土坑である。

I-B-3-c類・・・SC2 (第31図)、SC20 (第34図)

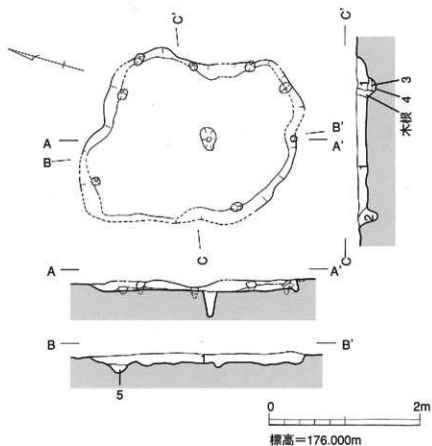
SC2はC21グリッド、SC20はP34・35グリッドに位置する。埋土は御池ボラ混黒褐色土と御池ボラ混暗褐色土で、最上層中央に文明白ボラがレンズ状に堆積している。

I-A-3-e類・・・SC23 (第35図)

SC23はL・M24グリッドに位置する。

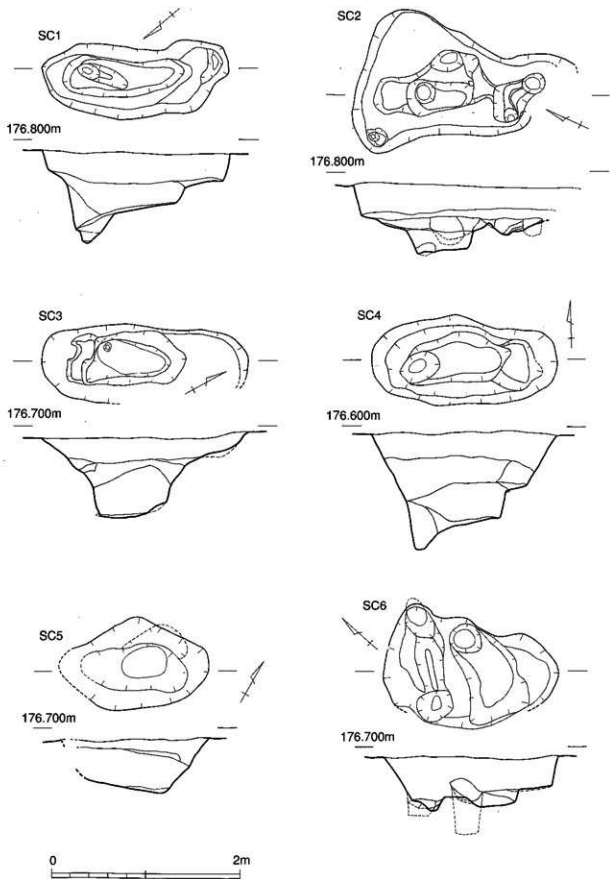
I-B-3-f類・・・SC6 (第31図)

SC6はC21グリッドに位置する。



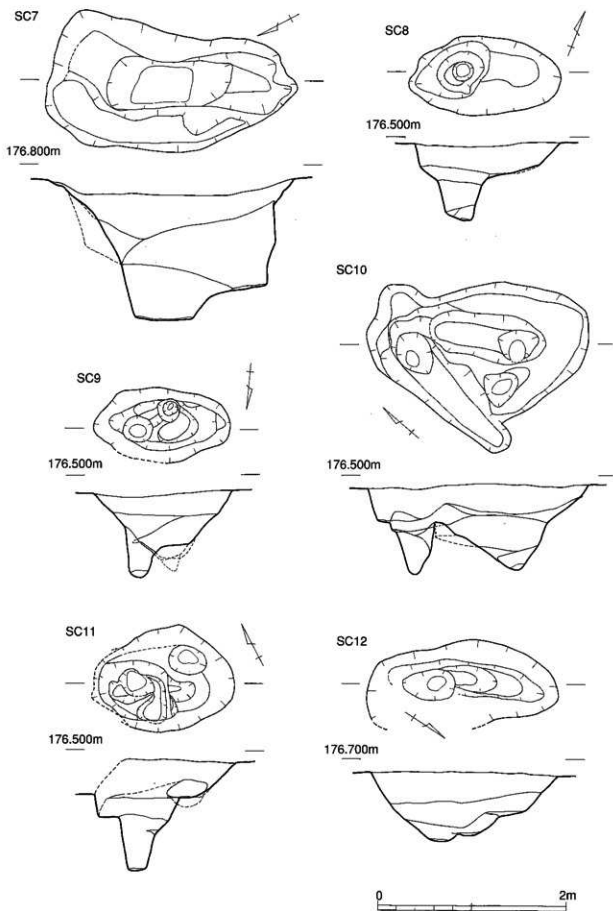
1. 黒褐色土～ややしまりあり。若干粘性あり。御池ボラを多量に含む。
2. 暗褐色土～ややしまりあり。御池ボラを多量に含み、ブロック状に混じる。
3. 暗褐色土～しまりあり。御池ボラを多量に含む。
4. 褐色土～しまりあり。御池ボラ細粒を含む。
5. 暗褐色土～しまりあり。御池ボラ細粒を多量に含む。

第30図 3区SA2実測図 (S=1/50)

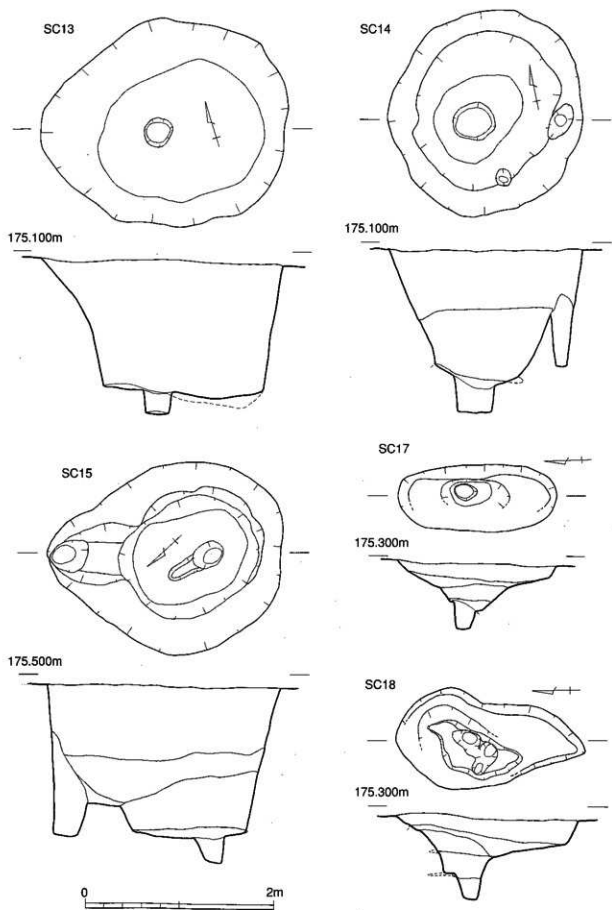


第31图 3区SC1~6实测图 (S=1/40)

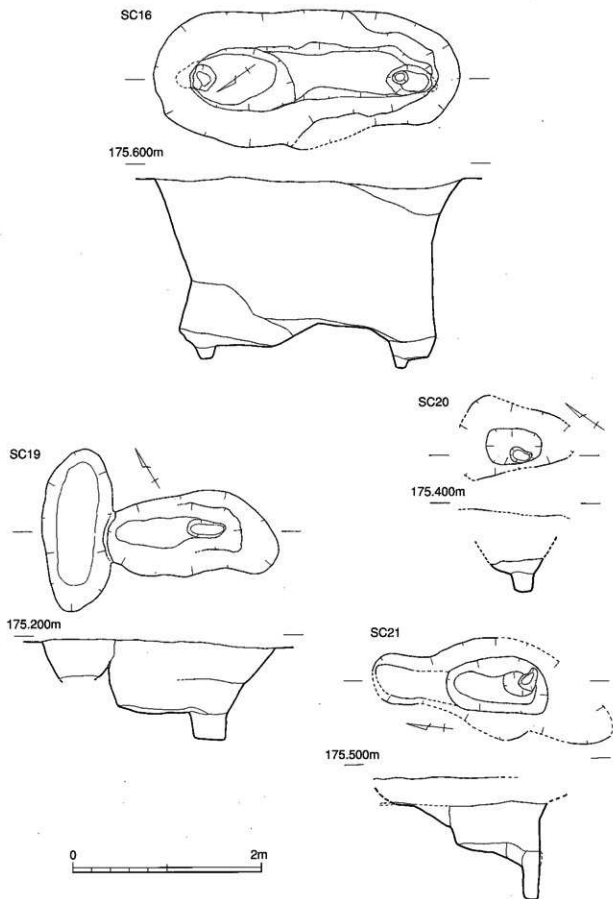




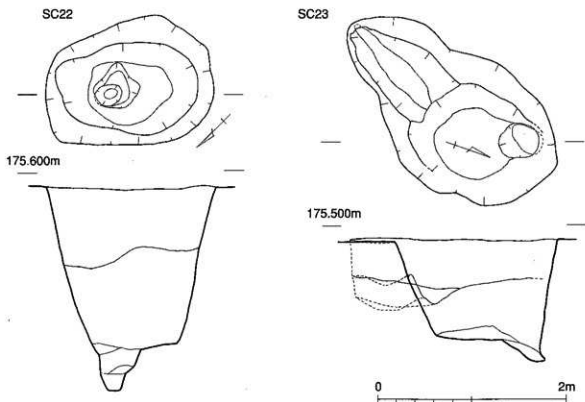
第32图 3区SC7~12実測図 (S=1/40)



第33图 3区SC13~15·17·18实测图 (S=1/40)



第34图 3区SC16・19~21实测图 (S=1/40)



第35図 3区SC22・23実測図 (S=1/40)

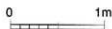
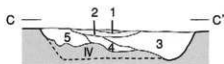
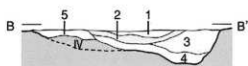
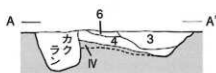
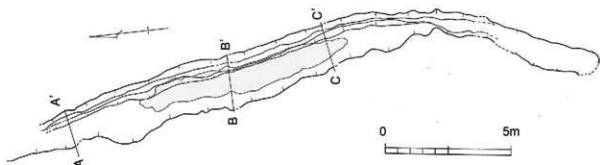
### 溝状遺構 (SE)

#### SE1 (第36図)

3区東側のI・M・N34グリッドの第IV層上面で検出した。SE1は南から北に向かって若干弧を描きながら延びている。南側は遺構が浅くなるとともに削平を受けているため途中で消滅する。北側は更に延びると思われるが、確認できたのは長さ約23mである。溝幅は0.8~2m、深さは深いところで35cmを測る。底面は西側が緩やかなテラス状を呈し、東側が深く落ち込んでいる。埋土全体に文明白ボラを含むことから比較的新しい年代が与えられると思われる。また、第1・2層は別遺構の埋土で、粘性を持った土(第2層)を貼った痕跡が見られる。遺物は土師器、陶磁器、磨製石鏃、打製石斧などが出土している。

### 柱穴群

柱穴群については第VI層(御池ボラ)上面で検出を行った。調査上の時間的な問題から全面調査はできなかった。埋土は御池ボラ混暗褐色土と御池ボラ混黒褐色土の2種類に分けられる。しっかりとした柱穴も確認できたが、建物は検出できなかった。



1. 黒色土～しまりあり。文明ボラ粒を若干多く、御池ボラ粒をわずかに含む。
2. 暗黄褐色土～やや軟質。黄褐色土が横筋状に入る。若干粘性あり。
3. 暗灰色土～やや軟質。文明ボラ粒を多く、御池ボラ粒をわずかに含む。
4. 暗褐色土～やや軟質。文明ボラ粒、御池ボラ粒を若干含む。
5. 褐色土～硬質。文明ボラ粒を若干、御池ボラ粒を多く含む。文明ボラ混黒色土硬質ブロックが混在する。
6. 黒色土～やや軟質。文明ボラ粒をわずかに含む。若干粘性あり。

第36図 3区SE1実測図 (平面: S=1/150、土層断面: S=1/40)

## 第6節 4区の調査

4区は1区より南側の圃場間の道路部分と建物部分の約5,920㎡である。遺構検出は第IV層上面と第VI層上面で行い、竪穴住居跡1基(古墳時代)、土坑14基、柱穴群、溝状遺構1条が確認されている。第VI層上面までの掘り下げは、時間の都合上全面には及ばなかった。縄文後期から晩期の土層が南の谷付近で集中しているが遺構は検出されていない。南側の中央谷部分は造成され、遺構、遺物は確認されなかった。

### 1. 縄文時代の遺物

W20・X19・Y20・A'20・B'44グリッドの第IV層から縄文後期後半に位置づけられる土器が出土している。特に調査区の南側、丘陵地先端部付近において遺物の集中がみられた。しかし、遺構の確認は出来なかった。

出土遺物は第37図に示している。124と132は西平式土器である。124は深鉢の口縁部で、「く」字形に折れ曲がった山形口縁頂部である。波頂部にV字形の刻みと口縁部に2本の沈線と両端刺止まりの短

沈線が施され、磨消縄文をもつ。内器面は横方向のミガキ、外器面は縦方向のミガキ仕上げが見られる。132は深鉢の頸部にあたると思われる。くびれた頸部に連続刺突文が施されている。内外器面ともナデ仕上げである。125～129は中岳Ⅱ式土器に相当する深鉢と思われる。125は口唇部がやや丸みをおび、口縁部内面に若干段をもつ。口辺部は外反し、胴部の張りが弱く、S字状を呈する。口縁部には2本、肩部には3本の凹線文、山形口縁頂部直下とその延長上の肩部には3～4個の凹点文が施されている。126は口唇部が平坦で、口縁部内面に明瞭な段をもつ。口辺部は外反する。口縁部に2本の凹線文が施されており、外器面はかなり丁寧な斜方向のミガキ仕上げが見られ、ススが付着している。127は口唇部と口縁部文様帯とに境がなく、口縁部内面は滑らかになっている。口縁部に2本の凹線文が施されている。128は胴部の張りが強く、肩部外面に明瞭な段が見られる。文様は無く、肩部下2cm程から上にススが付着している。129は肩部から下の部分に位置し、肩部が強く張り出すものと思われる。130は鉢の口縁部と思われる。口唇部は丸く、口縁部内面に段をもつ。口縁部外面には1本の沈線が施されている。131は鉢の肩部であると思われる。肩部に「ハ」字形の突起が施されている。133は鉢の底部である。平底で、胴部の張った鉢の底部になると思われる。

## 2. 弥生および古墳時代の遺構と遺物

### 竪穴住居跡 (SA)

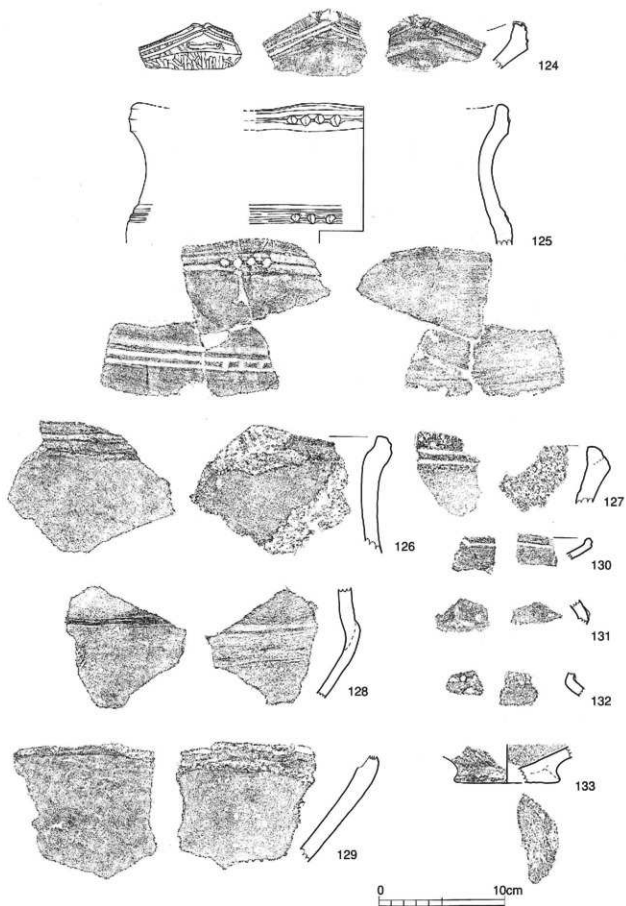
#### SA1 (第41図)

X39グリッドの第Ⅵ層(御池ボラ)上面で検出した。長軸3.7m、短軸3.15mの不定形な方形プランを呈する。検出面から床面までの深さは10～20cm、床面積は約9.7㎡を測る。主柱穴は壁際の中央部の2本で、中央には焼土が確認されている。主柱穴径は約25cm、深さは70cmを測る。明瞭な床の硬化面が確認出来なかったため住居の半分を掘りすぎってしまった。住居は掘り上げた後、土を敷いて整地したと思われる。土層で観察すると焼土面と同じレベルで埋土が分層でき、遺物も同レベル直上で出土しているため第13層上が生活面と考えられる。遺物は刻日突帯を持つ甕や高坏などが出土している。

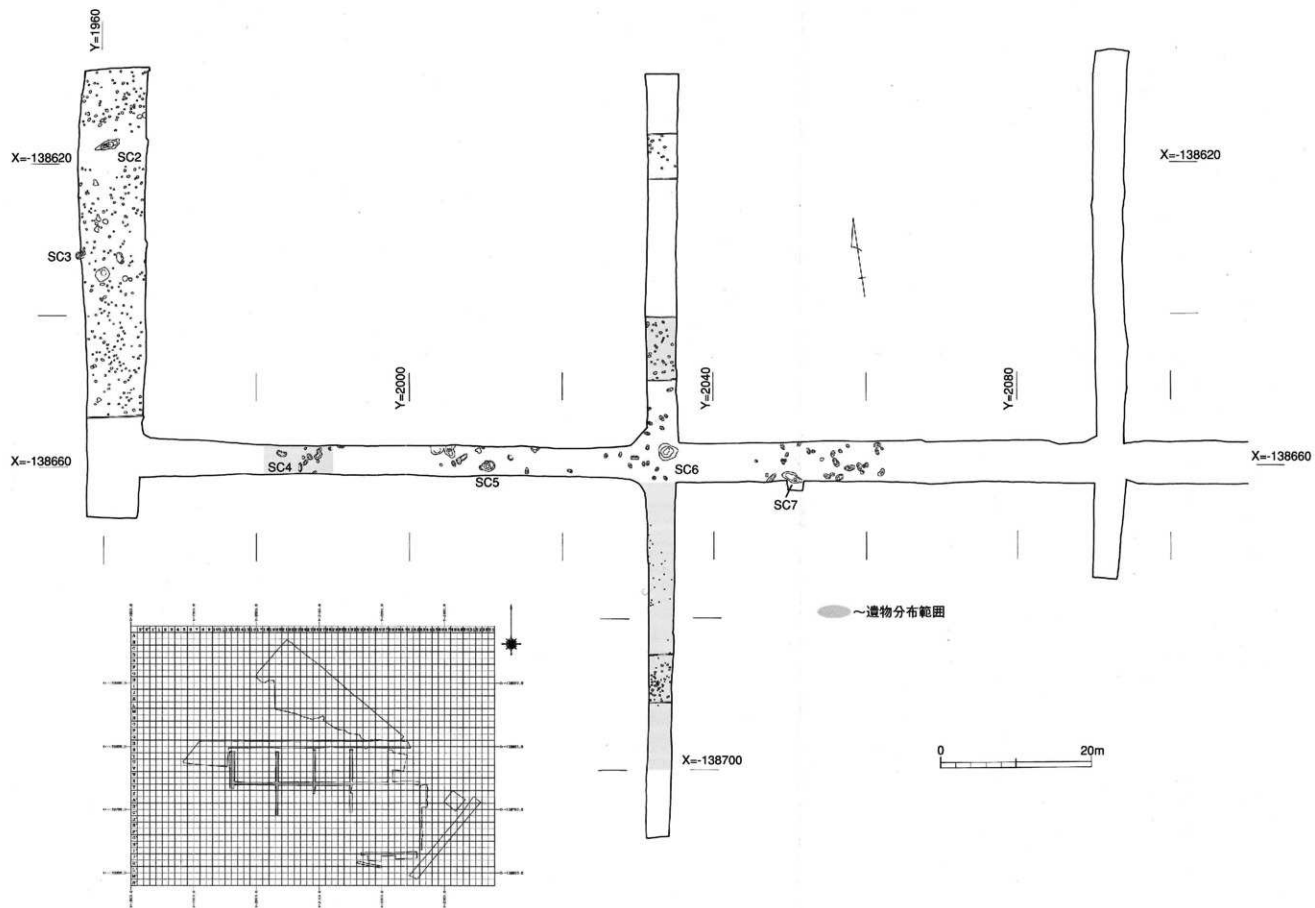
出土遺物は第42図に示している。134～136は甕である。134は小さめの平底の底部からバケツ状の胴部が立ち上がる。胴部上位がやや膨らみ、若干のくびれを持って外反する口縁部がのびる。胴部上位に刻日突帯が巡る。内器面はナデ、外器面はミガキ調整が見られる。135は甕の口縁部である。口唇部は平坦に仕上げられている。内外器面とも工具による粗いナデが見られる。136は刻日突帯を持つ甕の胴部である。胴部に丸みを持ち、頸部にくびれを持たない器形を呈すると思われる。器面調整は内外ともナデである。137は甕の底部と思われる。平底で、内外器面ともナデである。138～140は高坏の坏部である。138は坏底部に内外とも明瞭な稜はなく、丸みを持つ。口縁部は外反しからのびる。内外器面とも丁寧なナデ及びミガキが見られる。139と140は同一個体と思われる。坏底部に稜を持ち、口縁部は外反してのびる。口唇部は平坦に仕上げられている。内外器面ともナデ及びミガキ調整である。141と142は小型坏で同一個体と思われる。平底を呈し、内外器面ともナデ仕上げである。

### 遺構外出土の遺物

4区から出土した弥生土器及び古墳時代の土器を第43図に示している。遺物は調査区の南側、丘陵地縁辺部付近(Y20・Z20・A'～C'20グリッド)や東側のY43・Z43・A'43・B'43・44グリッドの第

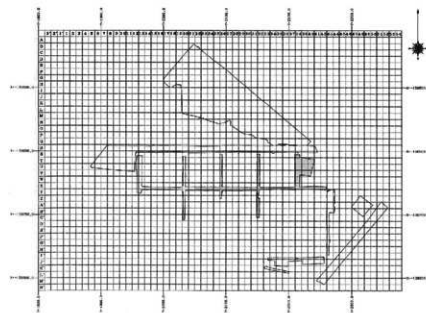


第37図 4区出土縄文時代の土器実測図 (S=1/3)

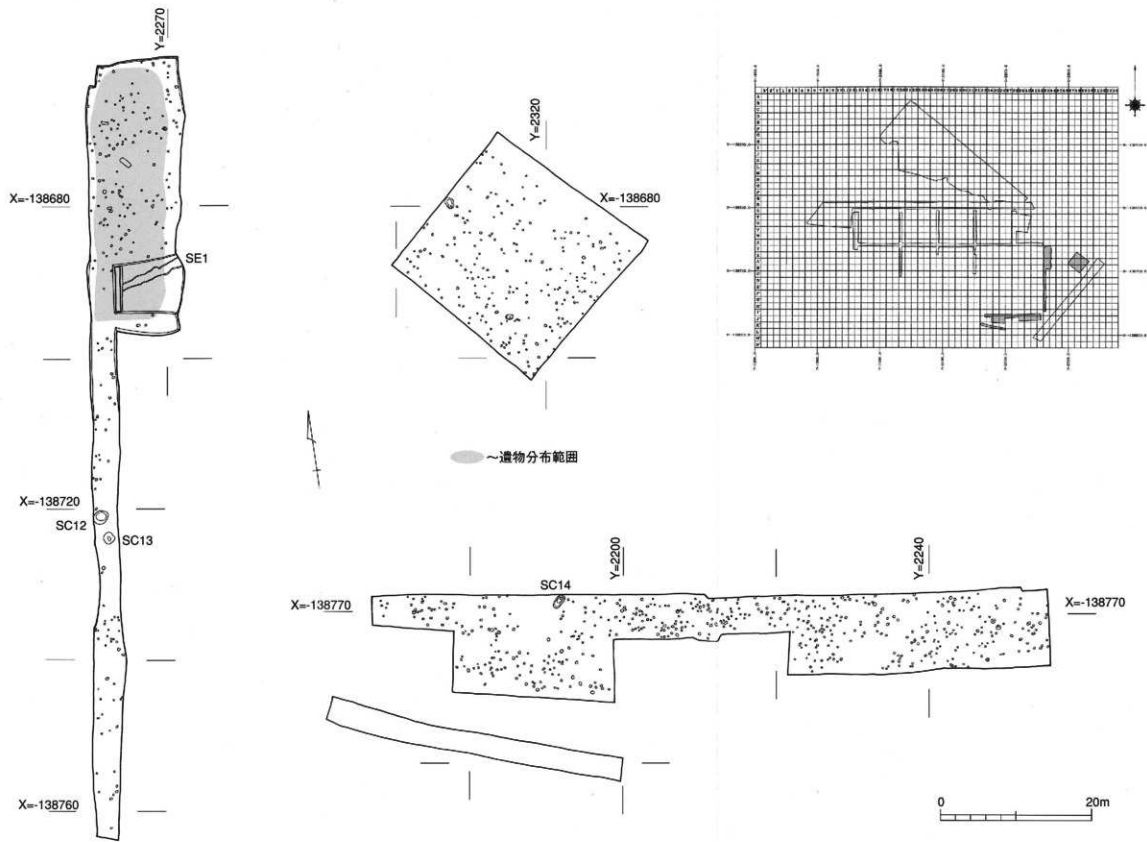


第38图 4区遺構・遺物分布図 (S=1/500)

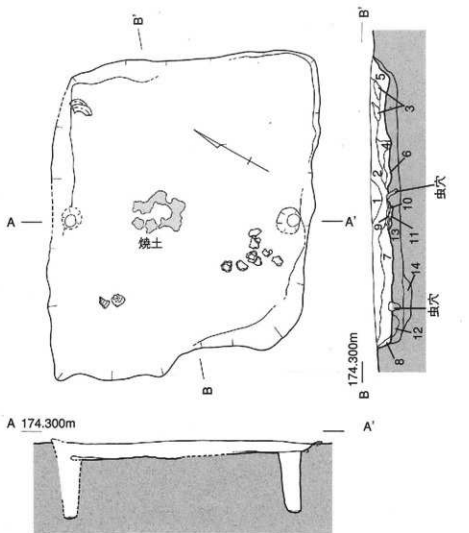




第39図 4区遺構・遺物分布図 (S=1/500)

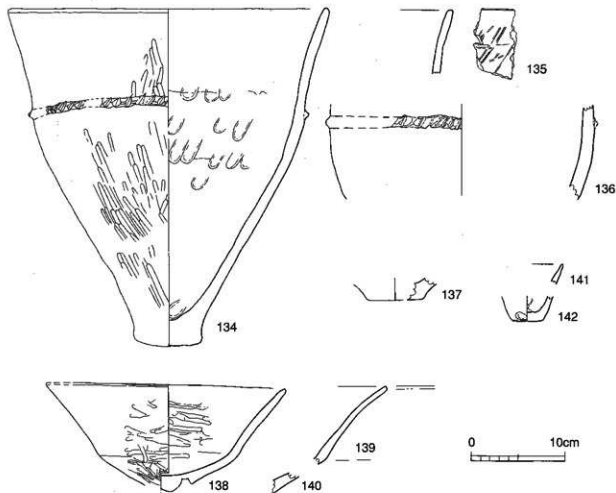


第40図 4区遺構・遺物分布図 (S=1/500)



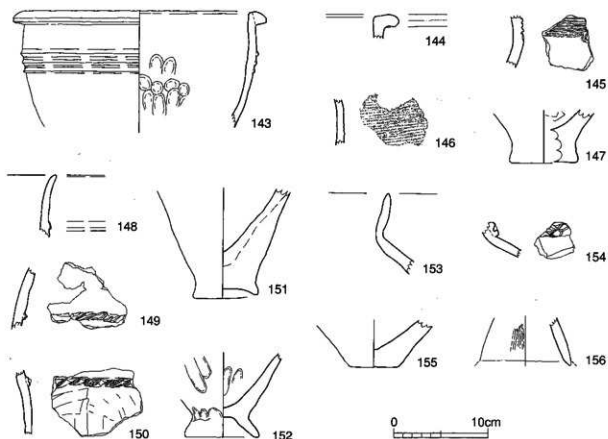
1. 茶褐色土～御池ボラを多量に含む。
2. 暗褐色土～多量の御池ボラと少量の炭化物粒を含む。
3. 黒褐色土～やや軟。御池ボラをやや多く含む。
4. 黒色土～第3層より軟。御池ボラをやや多く含む。
5. 黒褐色土～ややしまりあり。多量の御池ボラと少量の炭化物粒を含む。
6. 黒褐色土～御池ボラを多量に含む。
7. 黒褐色土～第3層よりやや軟。御池ボラを多量に含む。
8. 黒褐色土～御池ボラを多量に含み、もろく崩れやすい。
9. 褐色土～焼土の上層土。微量の御池ボラを含む。
10. 焼土
11. 暗褐色土～御池ボラ、炭化物を多量に含む。
12. 黒褐色土～やや軟。御池ボラを多量に含む。
13. 黒褐色土～しまりあり。御池ボラ、御池ボラブロックを多量に含む。
14. 黒褐色土～御池ボラを多量に含む。

第41図 4区SA1実測図 (S=1/50)



第42図 4区SA1出土土器実測図 (S=1/4)

IV・V層から出土している。143~147は弥生土器の甕である。143は丸みを持った胴部がやや内湾気味にのび、口縁部に断面台形の突帯を貼り付けている。突帯端部に凹線、胴部に3本の断面三角形の突帯が施されている。内外器面ともナデで、外器面にはススが付着している。144は甕の口縁部である。口縁部に丸みを帯びた断面長方形の突帯を貼り付けている。内外器面ともナデである。145は甕の胴部である。丸みを帯びた胴部上位に4本の細い突帯と「U」字形を描くような突帯が見られる。内外器面ともナデである。146は胴部にタタキを持つ甕である。147は底部である。平底で底部が厚く、裾部が若干外に広がる。148~156は上埴器である。148~150は刻目突帯を持つ甕である。148は頸部にくびれを持たず、口縁部が外反してのびる。内外器面ともナデで、外器面にススが付着している。149は頸部にくびれを持たず、口縁部が外に開く器形を呈すると思われる。内外器面ともナデである。150は頸部に明瞭なくびれを持たないが、やや胴部の張った位置に布目圧痕のある刻目突帯を持つ甕と思われる。器面調整は内外ともナデで、外器面にはかなりススが付着している。151と152は甕の底部である。151はバケツ状を呈する甕の底部と思われるが、上げ底で分厚く、裾部がやや広がる。内外器面ともナデである。152は脚状の底部で、裾部は広がる。くびれ部と内外器面には指頭痕が見られる。153~155は甕である。153は長胴形の壺になるといわれて、口縁部は内湾している。内外器面ともナデである。154は頸部に刻目突帯を持つ甕である。肩部の張った器形を呈し、突帯は格子目状に刻まれている。内外器面ともナデである。155は壺の



第43図 4区出土弥生～古墳時代の土器実測図 (S=1/4)

底部である。平底を呈し、内外器面ともナアである。156は高坏の脚柱部である。逆「ハ」字状に開く脚柱部は短く、外器面には縦方向のミガキが見られる。

### 3. 中・近世の遺物

第IV層から陶磁器がわずかに出土している。遺物は第44図に示している。157は皿の底部で、硬質の陶胎をした常白磁と思われる。全面施釉で、内面と崙付に砂目が見られる。朝鮮系で、15～17世紀。158は国産の摺り鉢と思われる。外面に灰釉が施されている。内面は釉の垂れ、口縁部は露胎である。18世紀頃か。

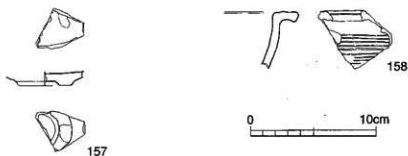
### 4. 時期不明の遺構と遺物

#### 土坑 (SC)

第IV層及び第VI層上面で総数14基検出した。その内、文明白ボラの堆積があるもの (I類) が2基、堆積が見られないもの (II類) が2基である。楕円形や円形プランなど様々で、出土遺物もなく時期、用途とも不明である。土坑分類基準にしたがって記述を行うが、計測値については土坑計測表 (1)・(2) を参考にしていただきたい。

I—B—1—a類・・・SC3 (第45図)、SC14 (第47図)

SC3はV12グリッド、SC14はI'36グリッドに位置する。長軸の片方にピット及び落ち込みを持つ



第44図 4区出土陶磁器実測図 (S=1/3)

ものである。埋土は下層に御池ボラ混黒褐色土や御池ボラ混暗褐色土が、最上層に文明白ボラがレンズ状に堆積している。

I-A-1-c類・・・SC7 (第45図)

SC7はY21・22グリッドに位置する。大型楕円形プランで中央にピットを持つ。埋土は御池ボラ混黒褐色土や御池ボラ混暗褐色土が主体で、上層に強く締まった文明白ボラと黒褐色土がある。白ボラは二次堆積と思われる。

I-A-1-f類・・・SC1 (第45図)

I-B-1-f類・・・SC4 (第45図)

SC1はT38グリッド、SC4はX15グリッドに位置する。楕円形プランを呈する。SC1は最上層に二次堆積と思われる文明白ボラが厚くレンズ状に堆積している。

I-A-2-c類・・・SC9

SC9は不定円形プランで、底中央にピットを持つ。上層に文明白ボラがレンズ状に堆積している。

I-A-2-f類・・・SC11 (第46図)

I-B-2-f類・・・SC5 (第45図)、SC12 (第46図)、SC13 (第47図)

SC11はV32グリッド、SC5はX~Y17・18グリッド、SC12・13はE'43グリッドに位置する。円形プランを呈するが、底面には何も持たない。いずれも土坑中位にかなり厚い文明白ボラの一次堆積が見られるため降灰時には開口していたと思われる。

I-A-3-c類・・・SC2 (第45図)

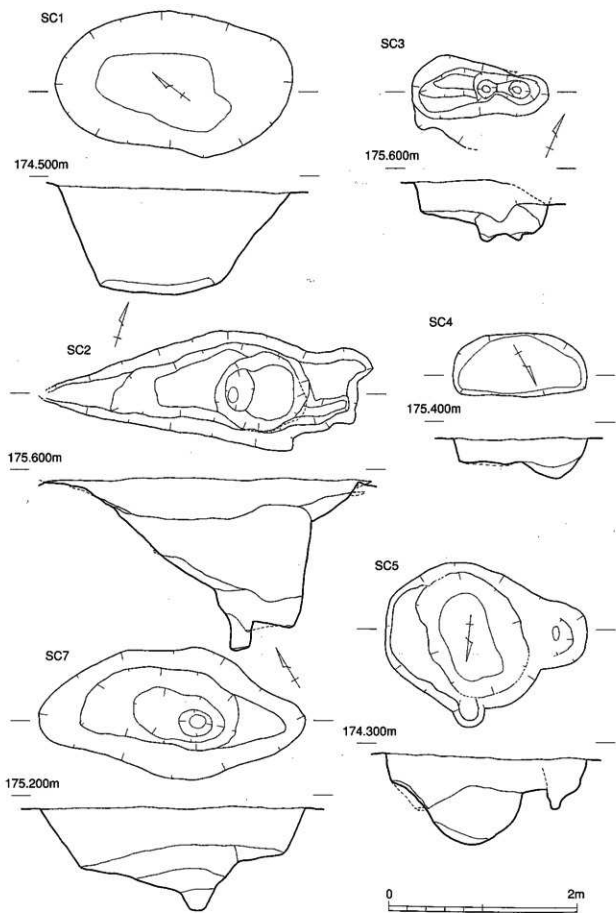
SC2はT13グリッドに位置する。かなり深く、中央にピット状のものを有する。埋土は御池ボラ混黒褐色土及び御池ボラ混暗褐色土が主体となり、上層中央に文明白ボラが薄く堆積している。

II-B-2-f類・・・SC6、SC10 (第46図)

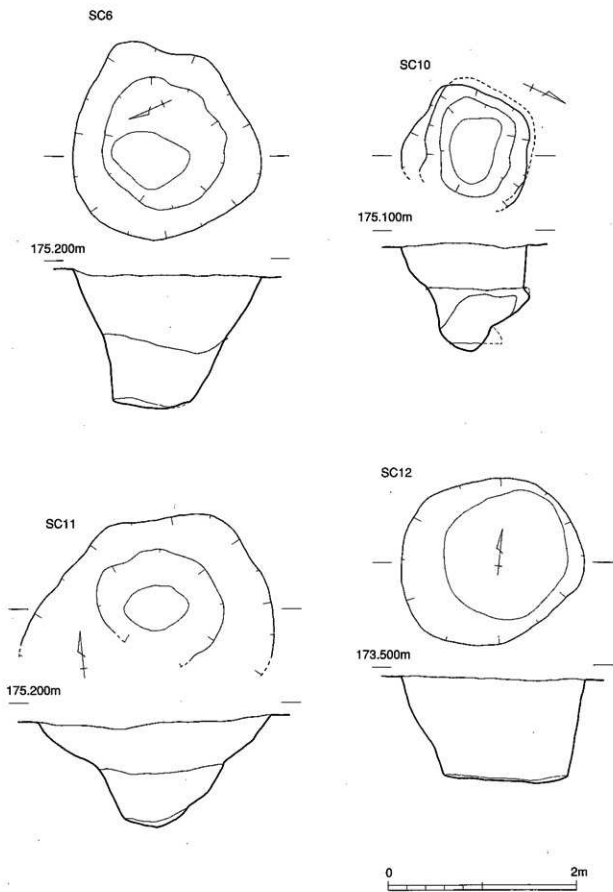
SC6はY21グリッド、SC10はV32グリッドに位置する。円形プランで、底面には何も持たない。埋土は御池ボラ混暗褐色土を主体とし、文明白ボラを含まない。白ボラ降灰前に完全に埋没していたものと思われる。

II-B-3-c類・・・SC8

SC8はX17グリッドに位置する。文明白ボラを埋土に含む土坑と切り合いを持つ。

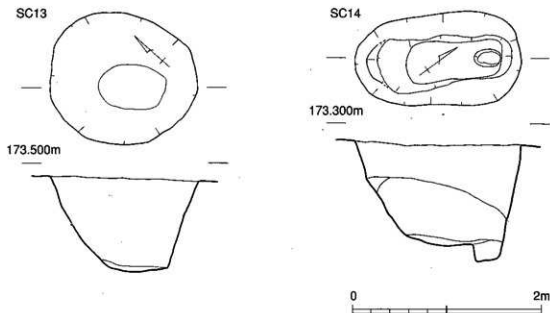


第45图 4区SC1~5·7实测图 (S=1/40)



第46图 4区SC6・10~12实测图 (S=1/40)





第47図 4区SC13・14実測図 (S=1/40)

### 溝状遺構 (SE)

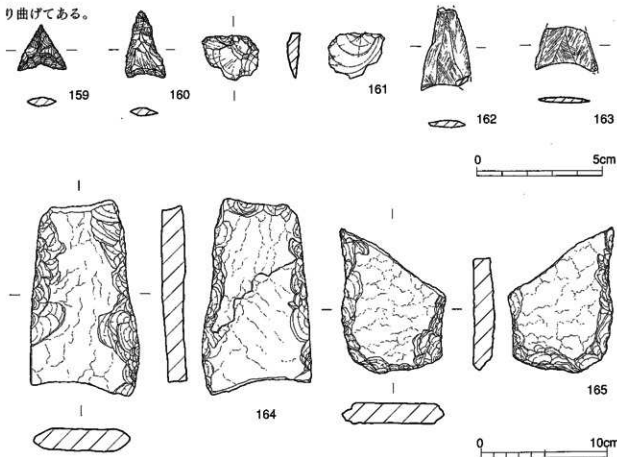
#### SE1

4区東側、A'43・B'43・A'44グリッドの第V層上面で検出した。南西から北東方向に走り、確認できた長さ8.5m、幅1.2m、深さ15~20cmを測る。遺構掘り込み面は後世の削平により不明であるが、第IV層からは掘り込みが確認できる。また、埋土中に文明白ボラが確認できるが時期は不明である。

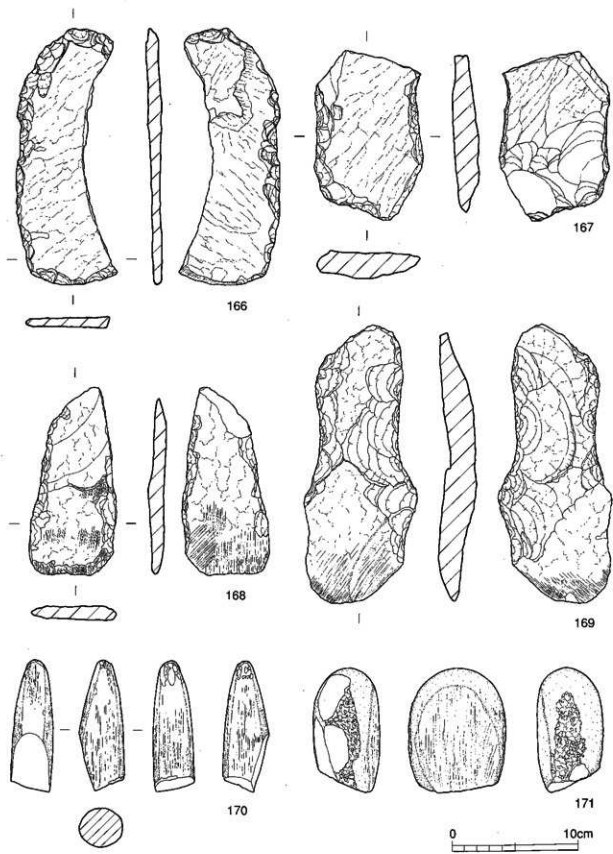
### 第7節 石器および鉄製品

ここでは、1区から4区で出土した石器と鉄製品について記述する。遺物の時期については不明であるため、器種ごとにまとめている。出土区および出土地については観察表を参考にいただきたい。遺物は第48~50図に示している。159と160は打製石鏃である。159は全体の形状が正三角形をしている凹基式の石鏃である。基部の両脚の先端は尖り、両側辺は基部から先端部へと直線的にのびる。石材は黒曜石である。160は全体の形状が二等辺三角形をしている凹基式の石鏃である。わずかに凹基で、右側辺に若干の折れが見られる。石材はサヌカイトか。161は使用痕剥片である。左下方に使用痕が見られる。石材は珪岩である。162と163は磨製石鏃である。全体の形状が二等辺三角形をし、基部にわずかな折れを持つ。両面に丁寧な磨きが施され、両側辺に両刃が作られている。石材はどちらも粘板岩である。164~167は打製石斧と思われる、石材は全て輝石安山岩である。164は両側辺に両面から加工が施されている。基部と下辺が欠損もしくは未加工であるかは判断が困難である。165は上部が欠損している。両側辺及び下辺に両面から加工が施されている。166は右側辺が欠損しているものと思われる。全辺に両面から加工が施され、下面下辺には擦痕が見られ、刃部が形成された痕跡とも考えられる。167は加工が一部にし

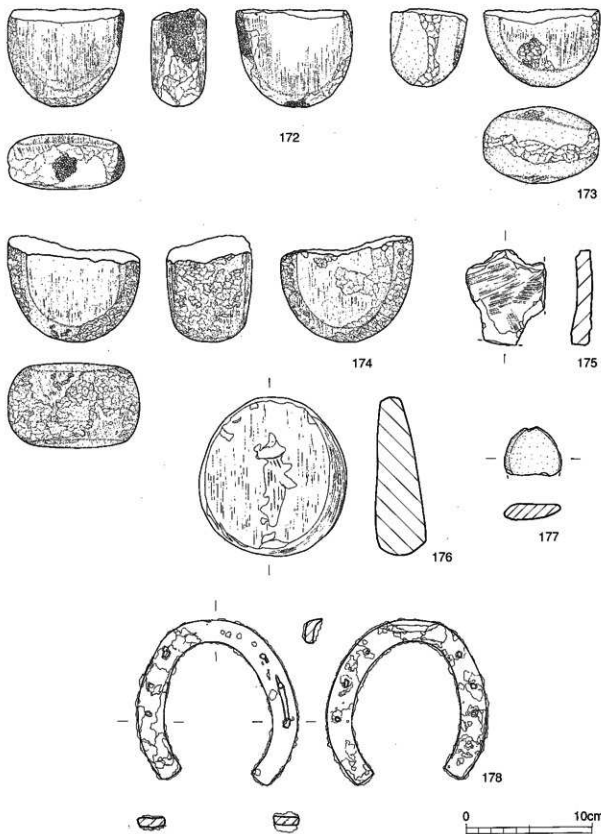
か見られず、未製品の可能性もある。168と169は局部磨製石斧である。168は両側辺と下辺部に加工を施し、下辺部両面を磨き、刃部を形成している。169は両側辺上部を剥ぎ取って抉りを形成し、手に持ちやすいように加工している。下辺部両面を磨き、刃部を形成している。石材は輝石安山岩である。170は磨製石斧と思われる。刃部は欠損しているため形態が不明であるが、基部断面は円形を呈している。石材は細粒砂岩である。171~174は磨石である。171は楕円形を呈し、下部は欠損している。上面に擦痕、両側面に敲打痕が見られる。石材は細粒砂岩である。172はやや扁平な楕円形を呈し、上部は欠損している。両面に擦痕、右側面と下面に敲打痕が見られる。石材は細粒砂岩である。173は楕円形を呈し、上部は欠損している。両面に擦痕と敲打痕、側面に敲打痕が見られる。石材は細粒砂岩である。174は分厚く、楕円形を呈し、上部は欠損している。両面には著しい擦痕、側面には著しい敲打痕が見られる。石材は細粒砂岩である。175は砥石である。欠損が著しく全体形は不明である。若干上面が内湾気味に反り、擦痕がある。石材は細粒砂岩である。176は台石である。円形で、座りの良い平坦な石を利用しており、上面には擦痕と敲打痕、右側辺上部に擦痕が見られる。石材は細粒砂岩である。177は石錘である。下部は欠損しているが、両端打ち欠きで、石材は粗粒砂岩である。178は馬蹄である。A'43グリッドの第IV層下部から出土している。3穴の釘打ち部分があり、釘打ち穴の所には溝が掘られている。馬蹄の先端は折り曲げてある。



第48図 石器実測図 (159~163 : S=2/3, 164・165 : S=1/3)



第49图 石器实测图 (S=1/3)



第50図 石器および馬蹄実測図 (S-1/3)

第1表 土坑計測表(1)

1 区						
土坑No	平面プラン	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	底面の特徴など	分類
SC1	不定形	2.40	1.84	0.96	壁際にビット有り	I-B-3-e
SC2	楕円形	2.54	1.44	1.22		I-A-1-f
SC3	楕円形	1.46	0.70	0.66	中央に落ち込み有り	I-B-1-c
SC4	不定形	2.82	0.94	1.00	長軸片方にビット有り	I-A-3-a
SC5	楕円形	2.18	1.04	0.96		I-B-1-f
SC6	楕円形	1.86	0.82	0.62	長軸片方に落ち込み有り	I-B-1-a
SC7	楕円形	1.62	0.96	0.78		I-B-1-f
SC8	楕円形	1.34	0.48	0.42	中央にビット有り	II-B-1-c
SC9	楕円形	1.52	0.53	0.43		II-B-1-f
SC10	楕円形	1.62	0.64	0.38		II-B-1-f
SC11	楕円形	2.82	1.23	1.73	長軸片方にビット有り	I-A-1-a
SC12	楕円形	2.30	1.15	0.97	中央にビット有り	I-B-1-c
SC13	楕円形	1.55	1.03	0.82	長軸片方と中央にビット有り	I-B-1-d
SC14	不定円形	1.73	1.29	1.10	中央付近に落ち込み有り	I-B-2-c
SC15	楕円形	1.06	0.52	0.37		I-B-1-f
SC16	楕円形	1.50	0.59	0.53	中央に落ち込み有り	II-B-1-c
SC17	楕円形	1.18	0.58	0.48		II-B-1-f
SC18	楕円形	1.73	0.68	0.74		II-B-1-f
SC19	楕円形	1.10	0.53	0.44		I-B-1-f
3 区						
SC1	楕円形	2.00	0.78	0.96	長軸片方にビット有り	I-B-1-a
SC2	不定形	(2.42)	0.98	0.74	中央に落ち込み有り	I-B-3-c
SC3	楕円形	2.20	0.82	0.84	中央に落ち込み有り	I-B-1-c
SC4	楕円形	1.98	0.94	1.22	長軸片方にビット有り	I-B-1-a
SC5	楕円形	1.60	0.90	0.56		I-B-1-f
SC6	不定形	1.86	1.16	0.82		I-B-3-f
SC7	楕円形	2.70	1.26	1.34	中央に落ち込み有り	I-A-1-c
SC8	楕円形	1.62	0.84	0.78	長軸片方にビット有り	I-B-1-a
SC9	楕円形	1.46	0.76	0.86	長軸片方にビット有り	I-B-1-a
SC10	不定形	2.36	1.54	0.90	長軸片方に落ち込み有り	I-B-3-a

第1表 土坑計測表(2)

3 区						
土坑No.	平面プラン	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	底面の特徴など	分 類
SC11	円 形	(1.52)	1.08	1.16	中央にビット有り	I-B-2-c
SC12	楕円形	2.04	0.94	0.74		I-B-1-f
SC13	円 形	2.60	2.16	1.66	中央にビット有り	I-A-2-c
SC14	円 形	2.08	2.16	1.72	中央と壁際にビット有り	I-A-2-d
SC15	円 形	2.50	2.04	1.86	壁際と中央付近にビット有り	I-A-2-d
SC16	楕円形	3.26	1.40	1.90	長軸片方にビット有り	I-A-1-b
SC17	楕円形	1.70	0.70	0.70	中央にビット有り	I-B-1-c
SC18	不定楕円形	2.02	0.90	0.86	中央にビット有り	I-B-1-c
SC19	楕円形	(2.48)	0.88	1.02	長軸片方にビット有り	I-B-1-a
SC20	不定形	(1.16)	0.76	0.82	中央にビット有り	I-B-3-c
SC21	不定楕円形	(2.60)	(1.06)	1.30	長軸片方にビット有り	I-A-1-a
SC22	不定円形	1.80	1.30	2.14	中央にビット有り	I-B-2-c
SC23	不定形	2.58	1.48	1.30	壁際にビット状落ち込み有り	I-A-3-e
4 区						
SC1	楕円形	2.52	1.44	1.17		I-A-1-f
SC2	不定形	3.36	1.18	1.90	中央にビット有り	I-A-3-c
SC3	楕円形	(1.43)	(0.96)	0.64	長軸片方に落ち込み有り	I-B-1-a
SC4	楕円形	1.41	0.68	0.43		I-B-1-f
SC5	不定円形	1.63	1.60	1.00		I-B-2-f
SC6	円 形	2.13	1.32	1.56		II-B-2-f
SC7	楕円形	2.80	1.42	1.12	中央にビット有り	I-A-1-c
SC8	不定形	(1.50)	1.40	1.14	中央にビット有り	II-B-3-c
SC9	不定円形	—	—	—	中央にビット有り	I-A-2-c
SC10	円 形	(1.46)	1.40	1.18		II-B-2-f
SC11	不定円形	(2.67)	(2.30)	1.14		I-A-2-f
SC12	円 形	1.93	1.70	1.14		I-B-2-f
SC13	円 形	1.56	1.38	1.03		I-B-2-f
SC14	楕円形	1.77	0.98	1.32	長軸片方にビット有り	I-B-1-a

第2表 出土遺物観察表(1)

遺物番号	類別	調査部位	山土地点	法量(m)		手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考	
				口径	底径	高さ	外面	内面	外面			内面
1	縄文	口縁部	1E U6 西端				器部に磨削工具による連続的ナゲ	丁寧なナゲ 黒炭	灰黄褐色	灰黄褐色	2mm以下の灰黄・灰褐・橙・灰黄・透明光沢の粒	外面にスス
2	縄文	器底	1E U6 西端				横方向に4本の比較的細く磨削文、黒炭	ナゲ	明赤褐色	にぶい黄褐色	1~2mmの橙・乳白色・透明光沢・黒色光沢の粒	
3	縄文	器底	1E U6 西端				横方向に4本の比較的細く磨削文	ナゲ 黒炭	にぶい橙	黒褐色	1~1.5mmの赤・乳白色・透明光沢・黒色光沢の粒	
4	縄文	器底	1E U6 西端				ナゲ 黒炭	ナゲ 黒炭	灰黄褐色	黄褐色	1~2mmの橙黄・乳白色・半透明光沢・黒色光沢の粒	
5	縄文	器底	1E U11 西端				丁寧な横方向の1がキ	丁寧な横方向の1がキ 黒炭	洗黄	にぶい黄褐色	2.5mm程度の橙黄粒 1mm以下の洗黄・灰・透明光沢粒	
6	縄文	器底	1E U10 西端				彫削の段状調整痕	丁寧なナゲ	にぶい黄褐色	灰白 灰黄	赤褐色粒 1mmの透明・黒色光沢粒 1~3mmの橙黄・洗黄・黒褐色粒	組織残
7	弥生	器底	1E U11 西端				4本の断面三角形の粘付突起、黒炭のナゲ、横方向の工具ナゲ、黒炭	横方向のナゲ 黒炭	黒褐色	褐灰	2~3mmの赤・灰黄色 1.5mm以下の洗黄・透明光沢粒	外面にスス
8	弥生	器底	1E U11 西端	(14E)			横方向のナゲナゲ 横方向のハケ目	横方向のハケ目 ナゲ、指痕痕	にぶい黄褐色	にぶい橙	4mm以下の洗黄・透明光沢・黒炭・橙・黒色・光沢・透明光沢粒	外面にスス
9	弥生	器底	1E U11 西端	(16E)			ナゲ、横方向のナゲ、横・斜方向のハケ目	横方向のハケ目 横方向のナゲ	にぶい橙	にぶい橙	透明・黒色光沢のガラス質の鱗片 1mm程度の赤・灰・褐色粒	
10	弥生	器底	1E U11 西端				横・斜方向のハケ目 横方向のナゲ、2本の断面三角形の粘付突起	ナゲ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	金色粒 透明・黒色光沢のガラス質の鱗片 1mm程度の赤・乳白色	
11	弥生	器底	1E U11 西端				縦方向の1がキ ナゲ、黒炭	工具による横方向のナゲ 黒炭	橙	橙	5mm以下の橙・灰黄色	
12	土師器	器底	1E U10 西端	(25E)			工具による横方向のナゲの横方向のナゲ、ナゲ、黒炭	ナゲ、工具痕、指痕痕 黒炭	にぶい黄褐色	洗黄 灰黄褐色	3mm以下の赤褐色・灰褐色 2mm以下の透明・黒色光沢粒	外面にスス
13	土師器	器底	1E U10 西端				ナゲ	ナゲ	橙	洗黄橙	2mm程度の黒色透明光沢・黒色光沢・橙・赤褐色	22と同一体?
14	土師器	器底	1E U10 西端				ナゲ 横方向のハケ目	ナゲ 横・斜方向のハケ目	洗黄橙	灰黄	3mm以下の橙・黒色粒	
15	土師器	器底	1E U10 西端				粗なナゲ	粗なナゲ	橙	橙	3mm以下の黒・橙・透明光沢粒	
16	土師器	器底	1E U41 西端				横方向のナゲ 黒炭	横方向のナゲ	洗黄 灰黄	にぶい黄	2mm以下の灰黄・橙黄・灰黄色 1.5mm以下の黒色光沢・透明光沢・半透明光沢粒	
17	土師器	器底	1E U10 西端				横方向のナゲ	横方向のナゲ	にぶい橙	にぶい黄褐色	2.5mm以下の橙・黒色粒	外面にスス
18	土師器	器底	1E U10 西端				横方向のナゲ	横方向のナゲ	にぶい橙	にぶい黄褐色	2.5mm以下の橙・黒色粒	外面にスス
19	土師器	器底	1E U10 西端				横方向のナゲ	ナゲ、指痕痕 黒炭	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	3mm以下の橙・橙黄・黒褐色粒 1mm以下の透明・黒色光沢粒	
20	土師器	器底	1E U10 西端				黒化寄しい	工具によるナゲ	洗黄橙	洗黄橙	微細な透明・半透明・黒色光沢粒 4mm以下の橙・黒・灰・赤黄色	21と同一体
21	土師器	器底	1E U10 西端				工具による横・斜方向の粗なナゲ	工具による横・斜方向の粗なナゲ	洗黄橙	灰黄	微細な透明・半透明・黒色光沢粒 4mm以下の橙・黒・灰・赤黄色	20と同一体
22	土師器	小穴部	1E U10 西端				横方向のナゲ	横・橙・斜方向のナゲ 工具痕	橙	にぶい黄褐色	2mm以下の灰白・灰・橙・赤褐色・黒色・黒色粒	外面にスス 12号と同様?
23	土師器	器底	1E U8 西端				ナゲ 粘土の垂れ	ハケ状工具による横・斜方向のナゲ	にぶい橙	にぶい黄褐色	4mm以下の赤褐色・橙・黒・乳白・灰黄色	外面にスス
24	土師器	器底	1E R11 西端	(13E)			粘付突起等横・斜方向のナゲ	ナゲ 黒炭	にぶい黄褐色	にぶい橙	微細~3mmの透明・黒色光沢・褐灰・灰白・橙・明赤褐色・洗黄褐色粒	外面にスス
25	土師器	器底	1E U5 西端				粘付突起等横・斜方向のナゲ	横方向のナゲ	粘黄褐色	洗黄	5mm程度の赤黄色 2mm以下の赤・橙黄・透明光沢・黒色光沢粒	内面に灰化物
26	土師器	器底	1E U11 西端				粘付突起等横・斜方向のナゲ	工具による横・斜方向のナゲ	にぶい橙	にぶい黄	3mm以下の灰白・橙・赤褐色 1mm以下の透明・黒色光沢粒	外面にスス
27	土師器	器底	1E U11 西端				粘付突起等横・斜方向のナゲ	ナゲ	にぶい橙	橙	1mm以下の灰白・透明光沢粒	内面に灰化物
28	土師器	器底	1E U10 西端				粘付突起等横・斜方向のナゲ	横方向のナゲ	橙	橙	3mm以下の灰白粒 1.5mm以下の灰白・橙・黒褐色粒 1mm以下の透明光沢粒	
29	土師器	器底	1E U10 西端				粘付突起等横・斜方向のナゲ	ナゲ 指痕痕	にぶい橙	にぶい橙	4.5mm以下の洗黄・橙・洗黄・にぶい黄褐色・灰黄・白・透明光沢・黒色光沢粒	
30	土師器	器底	1E U10 西端	(9A)			断面三角形の粘付突起、横方向のナゲ、指痕痕	ナゲ、指痕痕 黒炭	橙	褐灰	4mm以下の赤褐色・灰黄・黄褐色・黒色光沢粒	
31	土師器	器底	1E U10 西端				断面三角形の粘付突起、横方向のナゲ	横方向のナゲ	洗黄 灰黄	にぶい黄褐色	0.5mm~2mmの橙黄・黒・灰黄・透明・黒色光沢粒	

第2表 出土遺物観察表(2)

遺物番号	種別	器種・部位	出土 地点	法 量 (m)		手 法 ・ 簡 易 ・ 文 様 ほか			色 調		胎 土 の 特 徴	備 考
				口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面		
32	土師器	黒 刷-5B	1区 U9 V9	(3.8)		ナゲ 指環状 工具痕	ナゲ ナゲ	工具による横・斜 方向のナゲ	内面 洗灰層	焼灰	1mm以下の赤褐色・灰粒	
33	土師器	黒 刷	1区 T9 V9	4.0		ナゲ 指環状	ナゲ		洗灰層	焼灰	2mm以下の褐・黒・灰・黄灰粒 1mm以下の透明光沢粒	
34	土師器	黒 刷	1区 U9 V9	(6.1)		ナゲ	ナゲ		洗	内面 洗灰層	1.5mm以下の黒色粒 1mm以下の赤褐色	
35	土師器	黒 刷	1区 T9 V9	6.2		工具痕 縦方向のナゲ	縦	風化著しい	洗	灰質 洗灰層	2mm以下の褐・灰・赤褐色 2mm以下の透明粒	
36	土師器	黒 刷	1区 S9 V9	(5.3)		ナゲ 指環状	ナゲ	工具によるナゲ	内面 洗灰層	洗灰層	1~3.5mmの黒・灰・褐色・乳白・ 透明光沢・黒色光沢粒	内面に炭化 物、上げ底
37	土師器	黒 刷	1区 S9 V9	(6.8)		ナゲ 指環状	ナゲ		内面 洗灰層	洗灰層	1~4mmの褐・赤・黒色粒 1~2mmの透明光沢粒	上げ底
38	土師器	黒 刷	1区 S9 V9	(6.0)		ナゲ	割縁		洗	洗	2mm以下の赤褐色粒 2mm以下の黒褐色粒	上げ底
39	土師器	黒 刷	1区 S9 V9	6.15		ナゲ 工具によるナゲ	ナゲ		洗	洗灰層	2~5mmの灰・洗灰・褐色粒 1~1.5mmの褐・黒・半透明光沢 粒	上げ底
40	土師器	小笠 笠	1区 U1 V9	(5.5)		縦方向のナゲ 指環状	ナゲ		内面 洗灰層	洗灰層	3mm以下の赤褐色粒 2mm以下の黒褐色・灰褐色粒	上げ底
41	土師器	小笠 笠	1区 U9 V9	3.1		ナゲ 指環状	ナゲ		洗	洗	2mm以下の赤褐色・灰褐色粒 2mm以下の黒褐色・赤褐色粒	上げ底
42	土師器	小笠 笠	1区 T9 V9			ナゲ 指環状	ナゲ		洗	洗	2mm以下の赤褐色粒 1mm以下の赤褐色・灰褐色粒	
43	土師器	黒 刷	1区 U9 V9	(11.3)		横ナゲ	横ナゲ		洗	洗	1.5mm以下の無色透明光沢・灰白・ 褐色粒	
44	土師器	黒 刷	1区 S9 V9			ナゲ	ナゲ		洗	洗	2mm以下の灰褐色・灰白色	
45	土師器	黒 刷	1区 T9 V9			ナゲ	ナゲ		洗	洗	1mm以下の無色透明光沢・黒色光沢 粒	
46	土師器	黒 刷	1区 T9 V9			割足跡付突起 ナゲ	横ナゲ		洗	洗	2.5mm以下の灰白・灰・褐・赤褐色 粒 1mm以下の透明光沢粒	
47	土師器	黒 刷	1区 T9 V9	(3.0)		ナゲ	ナゲ 指環状		洗	洗	2mm以下の透明光沢粒 2mm以下の赤褐色粒 5mm程度の黄褐色粒	
48	土師器	黒 刷	1区 U9 V9	(9.8)		斜方向のヘケ目 ナゲ	ナゲ		洗	洗	4mm以下の褐・灰白・内面 褐色粒 3mm以下の乳白色光沢粒	
49	土師器	黒 刷	1区 S9 V9	(9.8)		風化気味・縦方向 のミガキ・工具痕・ ナゲ・指環状	風化気味 ナゲ	風化気味・縦方向 のミガキ・工具痕・ ナゲ・指環状	洗	洗	2mm以下の灰・灰白・褐色・ 透明光沢・褐色光沢粒	50・51と 同一個体
50	土師器	黒 刷	1区 S9 V9			風化気味 縦方向のミガキ 指環状	風化気味 ナゲ		洗	洗	3mm以下の灰・灰白・褐色・ 透明光沢・褐色・透明光沢・ 黒色光沢粒	49・51と 同一個体
51	土師器	黒 刷	1区 S9 V9			風化著しい ナゲ	ナゲ		洗	洗	2mm以下の黒・灰白・褐色粒	49・50と 同一個体 穿孔有り
52	土師器	黒 刷	1区 T9 V9			風化著しい ナゲ	風化気味 ナゲ		洗	洗	2mm以下の灰・灰白・褐色粒	
53	土師器	黒 刷	1区 S9 V9			風化著しい・ 縦方向のミガキ	ナゲ		洗	洗	2mm以下の赤褐色・灰・灰白・ 褐色粒 1mm以下の無色透明光沢粒 0.5mm以下の黒色光沢粒	透かし有り
54	土師器	黒 刷	1区 R7			縦方向のミガキ	ナゲ		洗	洗	無細な無色光沢・半透明光沢粒 3mm以下の褐・灰・黒色粒	
55	土師器	黒 刷	1区 R7 V9			縦方向のミガキ	ナゲ		洗	洗	2mm以下の赤褐色粒	55と同一個体
56	土師器	黒 刷	1区 R7 V9			風化著しい 縦方向のミガキ	ナゲ		洗	洗	2mm以下の赤褐色粒	55と同一個体
57	土師器	黒 刷	1区 U9 V9	(3.8)		縦・横方向のナゲ	斜方向のナゲ		洗	洗	4mm以下の赤褐色粒・2mm以下の褐・ 赤褐色・黒色粒・1mm以下の透明光沢 粒・柱状の黒色光沢粒	
58	土師器	黒 刷	1区 T9 V9	(7.5)		縦方向のナゲ	ナゲ		洗	洗	1.5mm以下の褐・赤褐色・黒褐色粒 1mm以下の透明光沢粒	
59	土師器	黒 刷	1区 T9 V9			横ナゲ	横ナゲ		洗	洗	2~3.5mmの洗灰・赤・透明光沢粒 1mm以下の洗灰・赤・透明光沢・ 黒色光沢粒	
60	青磁	黒 刷	1区 T9 V9			施釉	施釉		洗	洗	灰白・灰白	14C前後 中国
61	青磁	黒 刷	1区 U9 V9			施釉文 施釉	施釉文 施釉		洗	洗	灰白・灰白	14C前後 中国
62	青磁	黒 刷	1区 R7			施釉・貫入	施釉・貫入		洗	洗	灰白	14C前後 中国



第2表 出土遺物観察表(3)

遺物番号	種別	器種 部位	出土 地点	法量(cm)			手法・調査・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
63	青磁	蓋 蓋付底	1区 E24 西壁				施釉	施釉	灰白	灰白	灰白色	13~15C 観音原
64	青磁	蓋 蓋付底	1区 E4 西壁				彫刻彫弁文 施釉	施釉	灰オレンジ	灰オレンジ	灰白色土	14~16C
65	青磁	鉢 口縁	1区 E13 東壁下				へり捲文 施釉・貫入	施釉・貫入	オレンジ灰	オレンジ灰	灰白色土	15~17C
66	染付	皿 口縁	1区 E13 西壁				施釉	施釉	明緑灰	明緑灰	灰白色土	15~17C 中西
68	不割	鉢 口縁	1区 E13 西壁				口縁部に円形の突起、11 部ほどあり、横方向の突起部 の間に、縦方向のナデ	横方向のナデ	緑	緑	1.5mm以下の灰黄・灰白・黒・黒色 光沢・透明光沢粒	
69	織文	蓋 口縁	1区 E14 西壁				口縁部に1本の突起、上面 端部突起まりの縦向き、 器身側面、ナデ	ナデ	赤褐色	赤褐色	1.5mm以下の赤・灰白の粒	横状口縁 134と同一 個体?
70	織文	洗 口縁	1区 E14 西壁				口縁部に1本の突起、 丁字ナデ、一面 上方のミガキ	丁字ナデナデ	黄灰	黄灰	1.5mm以下の黄緑・灰白の粒	
71	織文	洗 口縁	1区 E14 西壁				丁字ナデ、横方向の ミガキ、口縁部に1本 の突起、口縁部にはミガキ	丁字ナデナデ 横方向のミガキ	赤褐色	赤褐色	3mm以下の黒・ 1mm以下の黒・黒 ・黒褐色光沢粒	
72	織文	洗 口縁	1区 E14 西壁				横方向の丁字ナデ ミガキ	横方向のナデ	赤褐色	赤褐色	5mm以下の黒・ 2mm以下の黒・ 赤褐色・乳白・微細な光沢粒	
73	織文	洗 口縁	1区 E14 西壁				菱形の段縁圧痕	丁字ナデナデ	洗黄緑	黄灰	0.5mmの透明・黒く 半透明のガラス質・ 1mm~3mm黒・ 褐色光沢粒	組織改良
74	織文	洗 口縁	1区 E14 西壁				菱形の段縁圧痕	黒 ミガキ	赤褐色	赤褐色	1~1.5mmの黒・ 透明光沢・黒色 光沢の粒	組織改良
75	織文	洗 口縁	1区 E14 西壁				菱形の段縁圧痕	ナデ	赤褐色	赤褐色	1~2.5mmの黒・ 灰・赤褐色・半透明 光沢・黒色光沢粒	組織改良
76	織文	洗 口縁	1区 E14 西壁				菱形の段縁圧痕	黒 ナデ	赤褐色	赤褐色	1mm以下の洗黄・ 透明光沢・黒色 光沢の粒	組織改良
77	織文	洗 口縁	1区 E14 西壁				横状圧痕 葉状の圧痕	ナデ	赤褐色	赤褐色	1mm以下の洗黄・ 灰・透明光沢・黒 い光沢の粒	組織改良、内 面に炭化物
78	織文	洗 口縁	1区 E14 西壁				横状圧痕 葉状の圧痕	ナデ 黒	赤褐色	赤褐色	1~3mmの黒・ 灰・透明光沢・黒 い光沢の粒	組織改良
79	赤生	蓋 口縁	1区 E14 西壁				断面三角形の斜口 給付突等 ナデ	ナデ	赤褐色	赤褐色	1mm以下の無色透明・ 灰褐色の粒	外面にスス
80	土師器	蓋 口縁	1区 E14 西壁				縦方向のハケ目 横ナデ	横ナデ	赤褐色	赤褐色	1.5mm以下の黄白・ 黒・赤褐色・黒 褐色の粒。1mm以下 の透明光沢の粒	
81	土師器	蓋 口縁	1区 E14 西壁				縦方向のハケ目 横方向のハケ目	横ナデ	赤褐色	赤褐色	1.5mm以下の灰白・ 黒・赤褐色の粒 1mm以下の透明光 沢の粒	外面にスス
82	土師器	蓋 口縁	1区 E14 西壁				縦方向のハケ目 横方向のハケ目	斜方向のハケ目	赤褐色	赤褐色	2mm以下の黒・ 赤褐色・黒・黒 褐色の粒 1mm以下の無色 透明光沢の粒	外面にスス
83	土師器	蓋 口縁	1区 E14 西壁				縦方向のハケ目 横方向のハケ目	横・斜方向のハケ 目	灰白	灰白	8mm程の黒・赤褐色・ 灰の粒 1mm以下の無色 透明光沢の粒	外面にスス
84	土師器	蓋 口縁	1区 E14 西壁			(5.5)	ナデ	ナデ	赤褐色	赤褐色	8mm程の灰の粒。3.5 mm以下の灰の粒。 1mm以下の無色 透明光沢の粒	内面に炭化 物
85	土師器	蓋 口縁	1区 E14 西壁			(4.8)	海胆底 黒	ナデ	赤褐色	赤褐色	2mm以下の灰白・ 黒・赤褐色・洗 黄緑の粒	
86	土師器	蓋 口縁	1区 E14 西壁				ナデ	ナデ	洗黄緑	洗黄緑	きめ細か	
87	土師器	蓋 口縁	1区 E14 西壁			(11.8)	横ナデ	横ナデ	洗黄緑	洗黄緑	1.5mm以下の赤褐色・ 0.5mm以下の無色 透明光沢の粒 1mm以下の灰白・ 灰・黒の粒	
88	須恵器	鉢 口縁	1区 E14 西壁			(5.0)	ナデ	ナデ	黄灰	黄灰	2.5mm以下の灰黄・ 黒の粒	へら切り肌
89	赤土師	鉢 口縁	1区 E14 西壁				ナデ	赤褐色	赤褐色	赤褐色	1~3.5mmの灰の粒	
90	青磁	蓋 口縁	1区 E14 西壁				施釉 貫入	施釉 貫入	オレンジ灰	オレンジ灰	灰白土	14~15C 観音原
91	織文	蓋 口縁	1区 E14 西壁				断面に1本の横方向 の突起、 丁字ナデ	丁字ナデナデ	赤褐色	赤褐色	2mm以下の黒・ 洗黄緑・半透明・ 黒色光沢粒	
92	織文	蓋 口縁	1区 E14 西壁				横方向の洗黄 ナデ	ナデ	赤褐色	赤褐色	1.5mm以下の灰 色光沢粒 2mm以下の黒色 粒	
93	織文	蓋 口縁	1区 E14 西壁				横方向の洗黄 ナデ	ナデ	赤褐色	赤褐色	1.5mm以下の灰 色光沢粒	
94	赤生	蓋 口縁	1区 E14 西壁			(28.6)	断面に4本の給付 突等、縦・横方向 の丁字ナデ	横・斜方向の丁 字ナデ 黒	赤褐色	赤褐色	2~3mmの洗黄・ 灰・赤褐色の粒 1mm以下の洗黄・ 透明光沢・黒色 光沢粒	外面にスス

第2表 出土遺物観察表(4)

遺物 番号	種別	出土 部位	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色 割		胎土の特徴	備考	
			口	底	高さ	外面	内面	外面	内面			
95	甕	大塚 口	3区 K1 V				丁寧な横ナゲ	内面	灰白	黄褐色透明・黒色光沢粒 2mm以下の乳白・黄灰・黒・褐色粒		
96	甕	口	3区 B1 V				丁寧な横ナゲ 口縁部は三角形の貼付突帯・突帯帯に包帯・ナゲ・削成	ナゲ 粘土のため	黄	2~3mmの赤褐色 2mm以下の焼灰・灰白・黒色光沢・褐色粒	外面にスス	
97	甕	口	3区 M1 V				口縁部に断面三角形の裏口貼付突帯ナゲ	ナゲ 指痕	灰白	2mm以下の赤褐色・焼灰・褐色粒 1~3mmの赤褐色		
98	甕	口	3区 K1 V	(11.0)			口縁部に断面三角形の裏口貼付突帯・突帯帯に包帯・ナゲ・削成	ナゲ	灰白	2mm以下の赤褐色	外面にスス	
99	甕	口	3区 V	(17.0)			口縁部に断面三角形の裏口貼付突帯・突帯帯に包帯・ナゲ・削成	横方向のナゲ 工具によるナゲ	灰白	2mm以下の赤褐色・褐色粒 2mm以下の透明・黒色光沢粒	外面にスス	
100	甕	口	3区 N1 V				口縁部に断面三角形の裏口貼付突帯・突帯帯に包帯・ナゲ	ナゲ 工具	黄	2mm以下の明色・褐色粒 0.5mm以下の透明・黒色光沢粒	外面にスス	
101	甕	口	3区 N1 V				口縁部に断面三角形の裏口貼付突帯・突帯帯に包帯・ナゲ	ナゲ	黄	2mm以下の赤褐色・黒・灰白・金色光沢粒		
102	甕	口	3区 J1 V				口縁部に断面三角形の裏口貼付突帯・突帯帯に包帯・ナゲ	ナゲ	灰白	2mm以下の灰・焼・黒・光沢粒		
103	甕	口	3区 K1 V				口縁部に断面三角形の裏口貼付突帯・突帯帯に包帯・ナゲ	ナゲ	灰白	2mm以下の赤褐色・黒・灰白粒 0.6mm以下の透明・褐色粒	内外面にスス	
104	甕	口	3区 L1 V				口縁部に断面三角形の裏口貼付突帯・突帯帯に包帯・ナゲ	ナゲ	黄	2mm以下の灰・赤・褐色粒 1.5mm以下の赤褐色・褐色粒 4mmの赤褐色	外面にスス	
105	甕	口	3区 L1 V				縦方向のナゲ 断面は横ナゲ	黄	黄	1mm以下の赤褐色透明粒 2.0mm以下の赤褐色 2mmの赤褐色・黒色光沢粒		
106	甕	口	3区 G1 V				4本の横方向の凹線 凹線の厚み、ナゲ	横方向のナゲ 黒灰	黄	2mm以下の赤褐色 1mm以下の灰白色	断面内、角部に入、凹線一帯	
107	甕	口	3区 E1 V				指痕状文 ナゲ	ナゲ 風化が強い	黄	黄	黄褐色透明・半透明・黒色光沢粒 2mm以下の黒・灰・褐色粒	
108	甕	口	3区 E1 V				断面三角形の貼付突帯・突帯帯に包帯・ナゲ・削成	横方向のミガキ 黒灰	灰白	黄	黄褐色透明・半透明・黒色光沢粒 2mm以下の黒・灰・褐色粒	
109	甕	口	3区 D1 V		4.3		ナゲ、黒灰 風化が強い	ナゲ、指痕 風化が強い	灰白	黄	1~2mmの赤・褐色・灰・褐色・透明光沢・黒色光沢粒	
110	甕	口	3区 D1 V		(5.0)		縦方向のミガキ	ナゲ、黒灰	黄	黒	2mm以下の赤褐色透明光沢・黄・灰・褐色粒	上げ底
111	土師器	口	3区 G1 V	(10.0)			ハン杖工具による縦方向のナゲ ナゲ、指痕	ナゲ、指痕	灰白	黄	2.5mm以下の透明光沢・褐色粒 2mm以下の赤・白色粒	外面にスス 111と同一器体?
112	土師器	口	3区 G1 V				ハン杖工具による縦方向のナゲ ナゲ、指痕	ナゲ	灰白	黄	1.5mm以下の透明光沢・焼・白色粒	外面にスス 111と同一器体?
113	土師器	口	3区 G1 V	(10.0)			ハン杖工具による縦・横・斜方向の粗なナゲ、黒灰	工具による横方向のナゲ 粘土のつぎ、黒灰	灰白	黄	3mmの赤・褐色粒 1mmの透明光沢・黒色光沢粒	
114	土師器	口	3区 E1 V				斜貼付突帯 横・斜方向のナゲ	ナゲ、指痕	灰白	黄	3mm以下の焼灰・黒褐色 2mm以下の透明・黒色光沢粒	
115	土師器	口	3区 E1 V				斜貼付突帯 ナゲ	ナゲ	灰白	黄	1~5mmの灰・焼・乳白・半透明光沢粒	
116	土師器	口	3区 K1 V				横方向のミガキ ナゲ	横方向のミガキ ナゲ	灰白	黄	黄褐色半透明・黒色光沢・黒・黄灰・灰白色	
117	土師器	口	3区 E1 V				風化が強い ナゲ 工具	ナゲ 工具	灰白	黄	1mm以下の灰白・無色透明光沢粒	丸底
118	土師器	口	3区 G1 V	0170	(8.0)	(1.0)	風化が強い ナゲ	風化が強い ナゲ	灰白	黄	1mm以下の黄褐色・赤褐色 赤褐色の赤褐色	へち切り底 赤褐色の赤褐色
119	土師器	口	3区 E1 V	(C1)	(7.4)	(3.0)	風化が強い ナゲ	風化が強い ナゲ	灰白	灰白	赤褐色 1mmの赤褐色	へち切り底
120	土師器	口	3区 E1 V		(8.0)		横ナゲ 風化が強い	横ナゲ ナゲ	灰白	黄	1mm以下の赤褐色・褐色粒 1.5mm以下の赤褐色・黒色光沢粒 黒色透明光沢粒	赤切り底
121	甕	口	3区 SA1				4本の横方向の凹線 凹線の厚み、ナゲ	横方向のナゲ ナゲ	灰白	黄	2mm以下の灰白色	断面内、角部に入、凹線一帯
122	甕	口	3区 SA1				横方向の凹線 ナゲ	丁寧なナゲ	黄	黒	3mm以下の灰白色	断面内、角部に入、凹線一帯
124	甕	口	4区 A1 V				口縁部に断面三角形の裏口貼付突帯・突帯帯に包帯・ナゲ・削成	横方向のミガキ	明赤褐色	灰褐色	2.5mm以下の黄白色 1mm以下の灰白・焼・黒色光沢粒	波状口縁 106・122と同一器体?
125	甕	口	4区 A1 V	(28.0)			口縁部に断面三角形の裏口貼付突帯・突帯帯に包帯・ナゲ・削成	横方向の丁寧なナゲ	灰褐色	黄	2mm以下の赤褐色・褐色粒 1mm以下の透明光沢粒	波状口縁
126	甕	口	4区 A1 V				口縁部に断面三角形の裏口貼付突帯・突帯帯に包帯・ナゲ・削成	ナゲ、黒灰	黒	黄	黄褐色透明・半透明・黒色光沢粒 3mm以下の赤・黄灰・黒褐色	外面にスス
127	甕	口	4区 A1 V				口縁部に断面三角形の裏口貼付突帯・突帯帯に包帯・ナゲ・削成	横方向のミガキ 風化が強い 横ナゲ	黄	灰白	2mm以下の赤褐色・黒・灰白色 3mm以下の黒色光沢・半透明光沢粒	

第2表 出土物観察表(5)

遺物番号	類別	前後・部位	出土地点	法量 (g)		手法・調整・文様ほか		色 別		胎土の特徴	備考	
				口徑	底徑	高さ	外 面	内 面	外 面			内 面
118	縄文	前期-前期	4区 D層				ナゲ 黒炭	ナゲ、黒炭 粘土のつなぎ目	明赤褐色 黒褐色 緑灰質	黄褐色 緑灰質	1mm以下の灰白・緑灰・黒褐色・透明 光沢粒	外面にスス
119	縄文	前期	4区 AD層				丁寧なナゲ	ナゲ 黒炭	緑灰質	緑灰質	3mm程度の灰白・暗赤褐色 1mm以下の灰白・灰褐色・透明光沢・ 黒色光沢粒	外面にスス
130	縄文	前期	4区 W層				口縁部に1本の織 方向の絞線 ナゲ	ナゲ	緑灰質	緑灰質	1mm以下の黒・灰黄・透明光沢粒	
131	縄文	前期	4区 X層				口縁部に「ハ」字形 の突起、ナゲ	ナゲ	緑灰質	緑灰質	2mm以下の黄褐色・灰白・黒色光沢粒	
132	縄文	前期	4区 W層				織部に連続的突起、 ナゲ、黒炭	ナゲ、黒炭	緑灰質	明褐色 緑灰質	2mm以下の灰白・灰黄・透明光沢粒	124と同一 個体?
133	縄文	前期	4区 A14層	(E3)			織、斜方向にナゲ 粗なナゲ	ナゲ 黒炭	緑灰質	緑灰質	光沢粒子、0.5mm程度の透明光沢粒、長方形 の黒色光沢粒、0.5~1mm程度の灰黄・黄褐色・ 灰白色、4mm程度の灰白・黄褐色	
134	土師器	前期	4区 SA1	(E2)	0.75	30.3	指目貼付突帯 織・斜方向のナゲ、 織・斜方向のナゲ	丁寧なナゲ 黒炭 粘土のつなぎ目	緑灰質	緑灰質	3mm以下の黄褐色・灰・無機透明光沢 粒、黄褐色粒	外面にスス
135	土師器	前期	4区 SA1				工具による斜方向 のナゲ	ナゲ	緑灰質	緑灰質	織部~1mm程度の透明・黒色光沢・緑 灰・黄褐色粒 2~4.5mm程度の灰・黒褐色 ・黒粒	外面にスス
136	土師器	前期	4区 SA1				指目貼付突帯 織・斜方向の ナゲ	ナゲ	赤 赤	赤 赤	1mm以下の灰褐色・黒褐色・黒粒	
137	土師器	前期	4区 SA1	(E3)			粗なナゲ	ナゲ	緑灰質	緑灰質	1~1.5mmの緑・乳白・黒色光沢・ 透明光沢粒	
138	土師器	前期	4区 SA1	24.95			織、斜方向のナゲ 丁寧なナゲ	織方向のナゲ 丁寧なナゲ	緑	緑	0.5mm以下の透明光沢粒 1mm以下の赤褐色	
139	土師器	前期	4区 SA1				丁寧なナゲ 斜方向のナゲ	丁寧なナゲ	明赤褐色	明赤褐色 緑灰質	2mm以下の赤褐色・灰褐色 2mm以下の半透明・黒色光沢粒	140と同一 個体
140	土師器	前期	4区 SA1				斜方向のナゲ 黒炭	丁寧なナゲ	緑灰質 オリーブ黒	緑	2mm以下の暗赤褐色・灰褐色・透明光沢・ 半透明光沢粒	139と同一 個体
141	土師器	前期	4区 SA1				ナゲ	ナゲ	緑	緑	1mm以下の灰白・暗褐色 1mm以下の光沢粒	142と同一 個体
142	土師器	前期	4区 SA1	(E3)			丁寧なナゲ 黒炭 織部	工具による斜方向 のナゲ 織部 ナゲ	緑灰質 黒	緑灰質	2mm以下の黒・緑・灰白・透明光 沢粒	141と同一 個体
143	弥生	前期	4区 D層	(E2)			口縁部に歪み斜線の粘 土質、黄褐色の織部、粘 土質、1.5mm程度の粘 土質、黄褐色、ナゲ、土に 1.5mm程度のナゲ	織方向の丁寧なナゲ 丁寧なナゲ、黒炭	灰黄褐色 緑灰質	灰黄褐色 緑灰質	0.5mm以下の金黃色 0.5mm以下の黒色光沢粒 1mm以下の黄褐色	外面にスス
144	弥生	前期	4区 D層				口縁部に丸縁をも つ歪み長方形の粘 土質、粗なナゲ	粗なナゲ	緑 緑	緑灰質 緑灰質	2mm以下の黒・灰黄・黒色光沢・半 透明光沢粒	
145	弥生	前期	4区 D層				4文字U字形の粘 土質、ナゲ、黄 褐色、黒炭	ナゲ 黒炭	明赤褐色 黒	明赤褐色 黒	1mm以下の灰白・赤褐色・透明・半透 明・黒色光沢粒	
146	弥生	前期	4区 D層				ナゲ	ナゲ	緑灰質	灰黄	4~5mm程度の赤褐色 1~2.5mmの赤・黒・黄・透明光 沢粒	
147	弥生	前期	4区 D層	(E2)			黒化腐蝕 ナゲ	工具によるナゲ 黒炭	緑灰質	緑灰質	1~2mmの黄褐色・灰・透明光沢粒	
148	土師器	前期	4区 D層				指目貼付突帯 ナゲ	ナゲ	赤 黒	赤	0.5mm以下の赤褐色 1mm以下の赤褐色・灰褐色・黒・白色粒 無機透明光沢粒	外面にスス
149	土師器	前期	4区 D層				指目貼付突帯 織・斜方向のナゲ	ナゲ	緑	緑	0.5~2mmの透明光沢・白灰・灰褐色・ 緑灰・赤褐色	
150	土師器	前期	4区 D層				指目貼付突帯 織・工具による 織、斜方向のナゲ	ナゲ	緑	緑	無機~2mmの透明光沢・灰白・灰褐色・ 赤褐色・緑灰・黄褐色粒	外面にスス
151	土師器	前期	4区 D層	6.7			ナゲ 工具質	ナゲ 黒化腐蝕しい	緑灰質	緑灰質	2.5mm以下の赤褐色 2.5mm以下の灰白色 1.5mm以下の黒色光沢・黒色光沢粒	上付近 外面にスス
152	土師器	前期	4区 D層	7.7			ナゲ 黒炭	ナゲ 黒炭	緑灰質	緑灰質	0.5mm以下の赤褐色 3mm以下の灰白色 無機透明光沢粒	上付近 外面にスス
153	土師器	前期	4区 D層				ナゲ	ナゲ	緑灰質	緑灰質	4mm以下の黒・灰・黒色粒 1mm以下の金黄色光沢粒	
154	土師器	前期	4区 D層				指目貼付突帯 織・斜方向のナゲ	織・斜方向のナゲ	緑灰質	緑	0.5~2mmの透明光沢・白灰・緑灰・ 明赤褐色・灰褐色	
155	土師器	前期	4区 D層	(E2)			工具によるナゲ ナゲ	ナゲ 黒炭	緑灰質	灰黄	1~2.5mmの赤・黒・緑・黒・乳白・ 透明光沢粒	
156	土師器	前期	4区 D層				織方向のナゲ ナゲ 黒化腐蝕しい	ナゲ ナゲ	緑	緑	1mm以下の灰白色 無機透明光沢粒	
157	常内磁	前期	4区 D層	(E2)			動物 粘土	動物 粘土	灰黄	灰黄	黄褐色土	15~17℃ 群系
158	陶器	前期	4区 D層				動物 織方向のナゲ	動物 織方向のナゲ	緑オリーブ	灰黄 オリーブ黒	灰褐色土	18℃以下 群系

第3表 石器計測表

V(79) 番 号	出土地点	器 種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	石 材	備 考
123	3 区 S A 1	砥 石	20.5	7.45	5.75	1,500	砂岩	
159	1 区 R IV 上	打製石鏃	1.8	1.9	0.3	0.7	黒曜石	
160	1 区 R IV 上	打製石鏃	2.65	1.6	0.3	1.4	サヌカイト?	
161	1 区 R IV 36層	使用痕跡片	1.8	2.25	0.5	1.7	珪岩	
162	3 区 O IV 30層	磨製石鏃	3.35	2.0	0.22	1.9	粘板岩	
163	3 区 S E 2	磨製石鏃	1.75	2.5	0.2	1.3	粘板岩	
164	2 区 T IV 46層	打製石斧	15.4	8.6	1.9	416	輝石安山岩	
165	V 層	打製石斧	(10.4)	8.3	1.7	229	輝石安山岩	
166	3 区 Q IV 38層	打製石斧	11.2	(7.9)	1.1	226	輝石安山岩	
167	3 区 K IV 24層	打製石斧	(13.5)	8.65	2.2	320	輝石安山岩	
168	4 区 U IV 42層	同磨製石斧	14.8	7.0	1.25	174	輝石安山岩	
169	4 区 X IV 41層	同磨製石斧	21.9	8.95	2.65	600	輝石安山岩	
170	4 区 A IV 20層	磨製石斧	(10.35)	3.65	3.45	163	細粒砂岩	
171	4 区 Z IV 20層	磨 石	(9.85)	7.75	5.8	570	細粒砂岩	
172	4 区 X IV 19層	磨 石	(7.82)	9.25	4.35	505	細粒砂岩	
173	4 区 X IV 20層	磨 石	(6.25)	9.2	6.05	471	細粒砂岩	
174	3 区 L IV 24層	磨 石	(8.4)	10.5	6.7	840	細粒砂岩	
175	3 区 J IV 24層	砥 石	(7.45)	(6.35)	1.65	82	細粒砂岩	
176	2 区 L IV 44層	台 石	12.5	11.6	3.85	810	細粒砂岩	
177	4 区 A IV 44層	石 鏃	(4.95)	4.5	1.3	31	細粒砂岩	

第4表 煙管および馬蹄計測表

V(79) 番 号	出土地点	器 種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	備 考
193	1 区 R IV 36層	煙 管 口	8.2	1.05	—	11.2	
178	4 区 A 43	馬 蹄	(12.9)	(12.6)	(0.9)	264	

## 第IV章 まとめ

「牧の原」という地名のごとく拓けた台地で、牧場を思わせる場所に遺跡は立地していた。中・近世の馬場跡等が確認されることも予想したが・・・。

簡単にではあるが、調査で確認された遺構や遺物についてまとめてみたい。

### 1. 縄文時代の遺物について

今回の調査で出土した縄文時代の土器は後期から晩期のもので、そのほとんどが小片である。遺構は確認されていないが、2区や4区の南側の丘陵端部にかけて遺物の集中がみられた。特に4区の第IV層から出土した土器で、125～129は中岳Ⅱ式土器群に該当するものと思われる。特に125は、柴畑光博氏(1989)の形式分類ではⅡ-2形式に相当し、三万田式と御領式土器に併行する縄文後期後葉から晩期前葉の間に位置付けられる。其内では宮崎市平畑遺跡、山田町中村遺跡、都城市の中尾山・馬渡遺跡や大岩田村ノ前遺跡に中岳Ⅱ式土器群が見られる。また、2区では縄文時代晩期に属する組織痕土器の出土が目立つ。周辺では対岸丘陵上に位置する中尾山・馬渡遺跡で羅布瓦痕の浅鉢が出土している。

### 2. 弥生から古墳時代の遺物について

遺物は主に第Ⅳ・Ⅴ層から出土しているが、集中はなく点在している。

弥生時代の土器は、中期中葉から終末期にかけてのものが出土し、その大半は甕である。甕は、口縁の外側に粘土を貼り付けて逆L字形や鋤形の口縁をつくっている。南部九州における甕の土器様式に従って口縁部形態をみると次のとおりとなる。

断面形が三角形(96・97)のもの、「コ」字形(98・100～102)のものがあり、前者は吉ヶ崎式土器の古段階、後者は吉ヶ崎式土器の新段階に位置すると思われる。いずれも中期中葉頃となる。その他、同時期のものとして口縁部断面が鋤形で、口縁部がほぼ水平を呈する須玖Ⅰ式新段階の大甕(95)もみられる。7・94・145は同類の甕と思われる。口縁部形態から山ノ口式土器系の山地特有の土器と思われる。山ノ口式土器でみると、中段階の中期後葉に比定される。これらの土器は其内では都城市の大岩田村ノ前遺跡、本池遺跡、えびの市の野久首遺跡で出土している。また、106や堅穴住居内から出土した121・122は瀬戸内系の凹線文土器の無頸壺で中期後葉～後期初頭、103や104は其内の佐土原町中溝遺跡が標識とされる中溝式土器の甕で後期初頭のものも出土している。

古墳時代の土器についても甕が主流を成し、突帯を持たないものを持つものがある。前者は頸部にくびれのあるもの(113)と無いもの(21・111・112)とに分けられる。後者は、南九州独自の成川式土器で、頸部にくびれを持ち、くびれ部及びくびれ部下に刻目突帯を持つもの(24・25・83・115・150)と頸部にくびれを持たないものに分けられる。頸部にくびれの無いものには、刻目突帯を持ち口縁部が直口するもの(26・28)、刻目突帯を持ち口縁部が外反するもの(114・148)、断面三角形の突帯を持ち口縁部が外反するもの(31)、刻目突帯を持ち口縁部が内湾するもの(27)、断面三角形の突帯を持ち口縁部が内湾するもの(30)がある。これらの土器は其内ではえびの市の妙見遺跡や高原町の荒迫遺跡で報告されている。多々良友博氏(1981)による土器細分案によると第Ⅵ～Ⅶ期に相当すると思われ、5世

紀末～6世紀前半に位置付けられる。

### 3. 竪穴住居跡について

竪穴住居跡は3区で2基、4区で1基、計3基が確認されている。

3区の1号竪穴住居(SA1)は、直径4～4.3mの円形プランで、中央に凹みとその両脇に2個の主柱穴が配置され、周壁には14個の小ピットが並ぶ。床面積は12㎡を測る。出土遺物が少ないため所属時期は明らかではないが、住居の埋土中から弥生時代中期後葉～後期初頭に位置付けられる瀬戸内系凹線文無頸甕が出土していることから弥生時代中期後葉頃が比定される。また、中央の凹みとその両脇の2本の柱穴という遺構の形態では、いわゆる「松菊里型住居」の特徴が見られる。松菊里型住居は縄文時代晩期末～弥生時代前期の古い段階のものを指すが、こうした形態の竪穴住居は岡山県などでも弥生時代中期～後期にいくつか存在しているため、検討が必要とされている。

3区の2号竪穴住居(SA2)は、長軸約2.9m、短軸約2.1mの不定形プランで、中央に主柱穴1個と周壁に8個の小ピットを配している。床面積が4.4㎡と非常に小さく、通常の住居とは考えにくい。性格については特定できない。出土遺物が無いため時期は不明である。

4区で確認された1号竪穴住居(SA1)は、長軸3.7m、短軸3.15mの不定形方形プランで、床面積約9.7㎡の若干小振りな竪穴住居である。貼り床をもち、中央に焼土が確認できる。出土遺物は刻目貼付突帯をもつ成川式土器の甕や高環などが出土している。甕は、口縁部が外反し、口縁部と胴部の間に若干のくびれ(いわゆる頸部)を持ち、その下に刻目突帯を貼り付けているものと、口縁部は欠損しているが、丸みを持つ胴部上位に刻目突帯を持ち、頸部を持たずに口縁部が直線的に立ち上がるか、もしくは内湾すると思われるものが見られる。これらの甕は妙見遺跡のSA24で出土している甕や高環と同時期のものと考えられ、5世紀末～6世紀前半の年代が比定される。

### 4. 土坑について

土坑は、今回図示したもののだけでも56基あり、それ以外にもかなりの数が確認されている。土坑は埋土に文明白ボラが堆積するものとそうでないものの2種類に分けられ、それぞれに時期差があると思われるが、15世紀後半頃には開口していたものと、それまでには埋没していたものがあると推測される。第Ⅲ章でも記述しているが、簡単に調査結果をまとめた。

「1区の1号土坑(SC1)や3区の16号土坑(SC16)で植物珪酸体分析を行った。文明白ボラ堆積層直下からネザサ節やメダケ節が極めて多く確認されていることから、これらを何らかの目的で土坑内に集積したことも考えられる。また、3区のSC16では寄生虫卵分析を行ったが、明らかな消化残渣は検出されないことから、糞便が入れられていた可能性は考えられない。」などの結果報告がされている。当時の調査区周辺はイネ科、シダ類などの草木が生育し、その周辺にはシイ・コナラ属の森林があったと推測されている。中世の畑跡が確認されていることから、貯蔵穴や肥だめなどを想定するが、遺構の性格は特定できない。

遺構の形態については、楕円形プランの土坑には長軸の片方または中央にピットをもつもの、いわゆるハイヒール状土坑が多く見られる。円形プランについても中央にピットをもつものがほとんどで、このピットが何であるか、機能については不明である。

## 5. 畝状遺構について

今回確認された畝状遺構は、15世紀後半に降下したとされる桜島起源の文明降下礫石（通称：文明白ボラ）を覆土にもつものである。当地域周辺においては、この時期（中世後半）の水田跡や畑跡などの生産遺跡が多く確認されている。上牧第2遺跡、中尾山・馬渡遺跡、正坂原遺跡など丘陵上では畑跡が、低位段丘から低地に位置する鶴喰遺跡、脇穴遺跡、畑田遺跡、丹智丘谷遺跡では水田跡や畑跡が見られる。

畝状遺構は文明白ボラを覆土にもつ平行して走行する小溝群であるが、遺構の性格については検討が必要である。今のところ小溝部分は畑の畝間か、火山灰降下後の災害復旧痕であるかの2つが考えられる。①畝間間（畝山）の幅が小さい ②覆土の文明白ボラに混入物が多いなどのことから復旧痕の可能性が指摘されるが実証するには至っていない。

近年、県内における畑跡の調査例が増加しているとはいえども、遺構の解釈については不明瞭な点が多い。高原町荒迫遺跡で平安時代の畝跡が確認されており、畝溝と畝山がかなり広い特徴が見られる。都城市域で確認される中世の畝状遺構はいずれも小振りのものが多く、これが時期差であるか、栽培作物による差であるかは不明である。また、栽培作物では、プラントオパールを持たない植物については土壌質的、立地的に花粉や種子を検出するのが難しい場合が多く、栽培種決定に困難を要している。

### （参考文献）

- (1) 『妙見遺跡 平原遺跡 野久首遺跡』九州縦貫自動車道（人吉～えびの間）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第2集 宮崎県教育委員会 1994
- (2) 『荒迫遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第11集 宮崎県埋蔵文化財センター 1998
- (3) 『南溝手遺跡1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書 100 岡山県教育委員会 1995
- (4) 田嶋博之「IV九州系の土器からみた門線文系土器の時間位置」『日本における石器から鉄器への転換形態の研究』愛媛大学 下條信行他 1998
- (5) 柴畑光博「東南部九州におけるある縄文土器の形式組列 ～中岳Ⅱ式土器の再検討～」『鹿児島考古』第23号 鹿児島県考古学会 1989
- (6) 多々良友博「成川式土器の検討」『鹿児島考古』第15号 鹿児島県考古学会 1981



牧の原第2遺跡全景



3区 SA1完掘状況

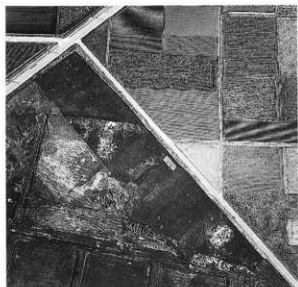




1区全景



1区 土坑 (SC) 分布状況



3区全景



3区 SA2 完掘状況



3区 畝状遺構検出状況



3区 畝状遺構とSE1



1区 SB1



1区 SB2



3区 畝状遺構土層断面



3区 SA1小ビット断面 (左:a-a' 中:b-b' 右:c-c')



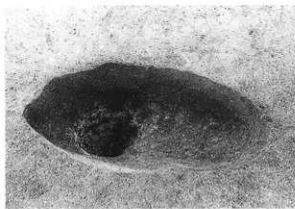
3区 土坑 (SC) 分布状況



3区 SC22土層断面



3区 SC8土層断面



3区 SC8完掘状況



3区 SC13 (手前)・SC14 (奥) 検出状況



3区 SC14完掘状況



3区 SC15土層断面



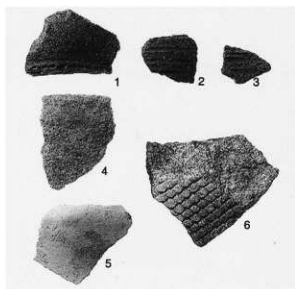
4区 包含層遺物出土状況



4区 SA1遺物出土状況



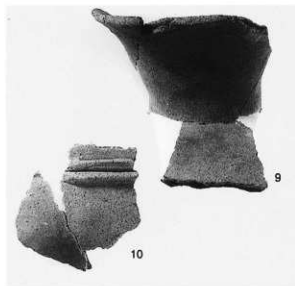
4区 SA1完掘状況



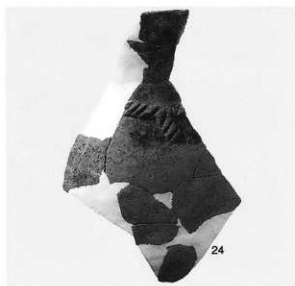
1区出土縄文時代の土器



1区出土弥生土器



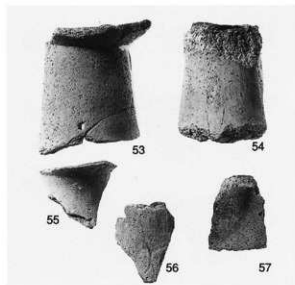
1区出土弥生土器

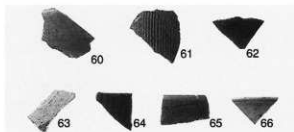
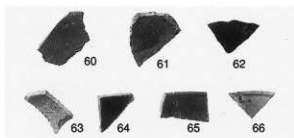


1区出土古墳時代の土器



1区出土古墳時代の土器





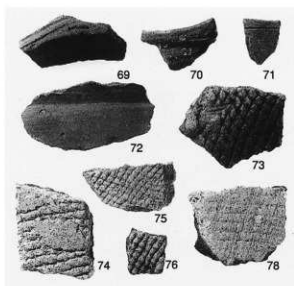
1区出土磁器（上：内面 下：外面）



1区出土煙管



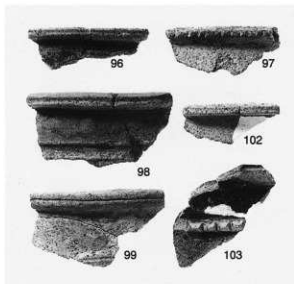
1区出土時期不明の土器



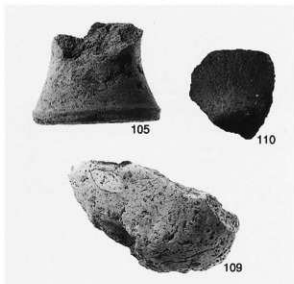
2区出土縄文時代の土器



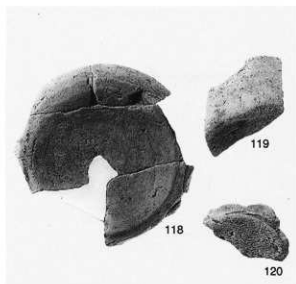
3区出土弥生土器



3区出土弥生土器



3区出土弥生土器



3区出土土師器



3区出土弥生土器(106)及び3区SA1出土遺物



134



125

4区出土縄文時代の土器



138

4区SA1出土土器



152

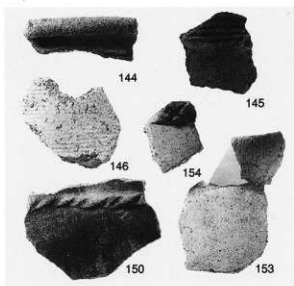
151

4区出土古墳時代の土器

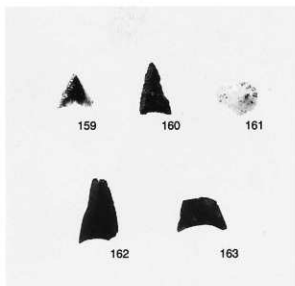


143

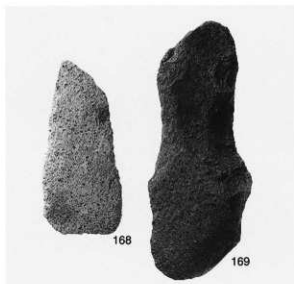
4区出土弥生土器



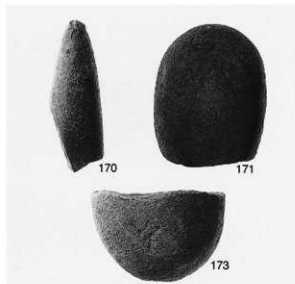
4区出土弥生土器及び古墳時代の土器



石鏃及び 片石器



局部磨製石斧



磨製石斧及び磨石



馬跡



試掘出土二重口罍

付 編

牧の原第2遺跡の自然科学分析

株式会社 古環境研究所



## 牧の原第2遺跡における植物珪酸体分析

### 1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 ( $\text{SiO}_2$ ) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 1987)。

牧の原第2遺跡の発掘調査では、桜島文明軽石 (Sz-3, 1471年) 直下から軟状遺構が検出された。ここでは、同遺構におけるイネ科栽培植物の検討を主目的として分析を行った。

### 2. 試料

調査地点は、トレンチ1および3区SC-16 (土坑) の2地点である。試料は、トレンチ1では桜島文明軽石直下の軟状遺構から№1～№10の10点、3区SC-16では土坑埋土から№1～№5の5点が採取された。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

### 3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法 (藤原, 1976) をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約1gに対して直径約40 $\mu\text{m}$ のガラスビーズを約0.02g添加 (電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550℃・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42kHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による20 $\mu\text{m}$ 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10<sup>-5</sup>g) をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ (赤米) の換算係数は2.94、ヨシ属 (ヨシ) は6.31、ススキ属 (ススキ) は1.24、メダケ節は1.16、

ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75である。

## 4. 分析結果

### (1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1、2に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

#### [イネ科]

機動細胞由来：イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型（ススキ属など）、ウシクサ族型

#### [イネ科—タケ亜科]

機動細胞由来：メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、未分類等

#### [イネ科—その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

#### [樹木]

クスノキ科、その他

## 5. 考察

### (1) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネイネをはじめオオムギ族（ムギ類が含まれる）、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属型（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはイネが検出された。

イネは、トレンチ1の桜島文明軽石直下から出土した畝状遺構の畝部（試料1）から検出された。密度は700個/gと低い値であるが、同層は直上をテフラ層で覆われていることから、上層から後代のものが混入した可能性は考えにくい。したがって、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、未分類等としたものの中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題とした。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畝作物は分析の対象外となっている。

### (2) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

#### 1) トレンチ1（図2）

イネ以外の分類群では、全体的にネザサ節型や棒状珪酸体が多量に検出され、キビ族型、ススキ属型、ウシクサ族型、メダケ節型なども検出された。また、部分的にクスノキ科などの樹木（照葉樹）も少量検

出された。

以上のことから、当時の調査区周辺は、メダケ節やネザサ節などのタケ亜科やススキ属やチガヤ属などが生育する草原的な環境であったと考えられ、遺跡周辺ではクスノキ科などの照葉樹も見られたものと推定される。

## 2) 3区SC-16 (図1)

桜島文明軽石で覆われた土坑の埋土(試料1~5)について分析を行った。その結果、全体的にネザサ節型やタケ亜科(未分類等)、棒状珪酸体が多量に検出され、ススキ属型、ウシクサ族型、メダケ節型なども検出された。おもな分類群の推定生産量によると、ネザサ節およびメダケ節型が優勢となっていることが分かる。

以上のことから、当時の調査区周辺は、メダケ節やネザサ節などのタケ亜科やススキ属やチガヤ属などが生育する草原的な環境であったものと推定される。

## 6. まとめ

植物珪酸体分析の結果、桜島文明軽石(Sz-3, 1471年)直下の臥状遺構からは、少量ながらイネが検出され、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が認められた。遺跡の立地や周辺の植生から、ここで行われた稲作は畑作の系統(陸稲)であったものと推定される。

当時の調査区周辺は、メダケ節やネザサ節などのタケ亜科、およびススキ属やチガヤ属などが生育する草原的な環境であったと考えられ、遺跡周辺ではクスノキ科などの照葉樹も見られたものと推定される。

### (参考文献)

- 杉山真二 (1987) 遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点. 植生史研究, 第2号, p.27-37.  
杉山真二 (1987) タケ亜科植物の機動細胞珪酸体. 富士竹類植物園報告, 第31号, p.70-83.  
杉山真二・早田勉 (1997) 南九州の植生と環境—植物珪酸体分析による検討—. 月刊地球, 19, p.252-257.  
藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—. 考古学と自然科学, 9, p.15-29.

検出項目 (単位: ×100個/g)		トレンチ1										3区SC-16					
分類群 / 材料		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	1	2	3	4	5	
<b>イネ科</b>																	
イネ	7						7		22	15	7	7					7
半耳型	30	8	8														
ヨシ属	8																
ススキ属	111	121	45	30	37	29	87	38	89	43	20	51	47	23	37		
ウシカサ属	125	121	106	46	155	80	134	102	59	79	33	73	61	77	56		
<b>タケ類</b>																	
メダケ属	58	8	76	46	22	102	45	189	74	51	78	131	88	115	59		
メササ属	428	212	318	419	150	255	379	617	636	469	555	358	278	352	117		
クマザサ属	30	15	8	38	7	22	7	36	22	7	13	15	14	14	15		
未分類等	52	61	151	99	37	153	126	349	458	274	294	475	263	337	338		
<b>その他のイネ科</b>																	
家庭用稲		15					7			14	13	7	14	8	7		
米	339	469	499	679	390	488	654	817	820	599	588	857	597	757	484		
米	399	492	424	660	435	459	721	782	835	794	705	878	732	785	595		
<b>雑草</b>																	
クヌギ科	8									7					8		
その他	8									7					8		
検出項目総数	1576	1629	1650	1680	1185	1597	2170	2790	3008	2353	2305	2644	2041	2441	1725		

おもな分類群の検出率 (単位: kg/m <sup>2</sup> -cm)																	
イネ	0.22																
ヨシ属	0.48																
ススキ属	1.37	1.50	0.58	0.38	0.46	0.36	0.83	0.45	1.10	0.54	0.24	0.63	0.59	0.28	0.46		
メダケ属	0.88	0.09	0.88	0.53	0.26	1.18	0.52	2.19	0.88	0.59	0.91	1.62	1.02	1.33	0.68		
メササ属	2.05	1.02	1.53	2.40	0.72	1.32	1.82	2.96	3.05	2.26	2.66	1.72	1.33	1.69	0.58		
クマザサ属	0.22	0.11	0.06	0.29	0.06	0.18	0.06	0.27	0.17	0.05	0.10	0.11	0.10		0.11		
<b>タケ類の比率 (%)</b>																	
メダケ属	23	7	36	19	23	45	22	40	21	20	25	46	42	44	50		
メササ属	69	83	62	71	69	48	75	65	75	78	73	51	54	56	42		
クマザサ属	7	9	2	10	5	6	2	6	4	2	3	3	4		8		

表1 牧の原第2遺跡における植物珪酸体分析結果

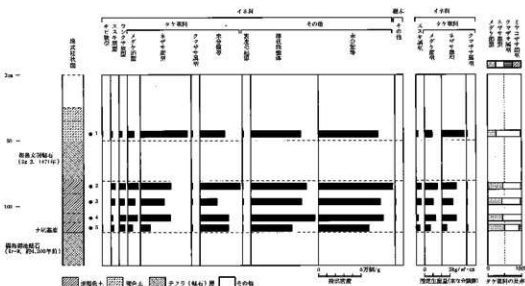


図1 牧の原第2遺跡、3区SC-16における植物珪酸体分析結果

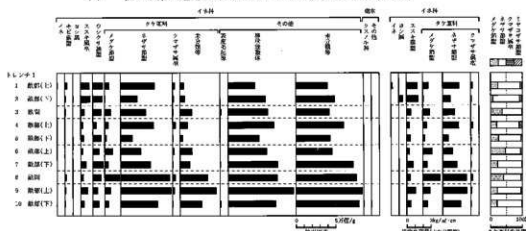
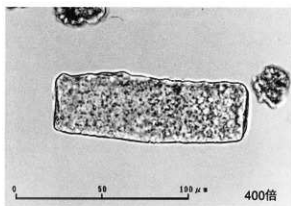


図2 牧の原第2遺跡、桜島文明軽石直下の畝状遺構における植物珪酸体分析結果



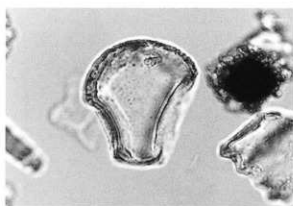
1 キビ族型 トレンチ1 試料1



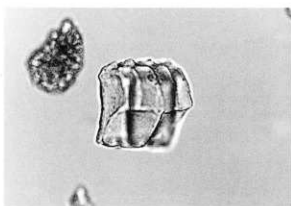
2 ヨシ属 トレンチ1 試料2



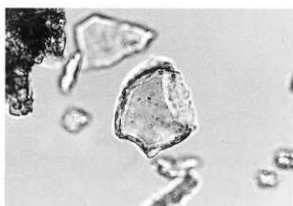
3 ススキ属型 3区SC-16 試料5



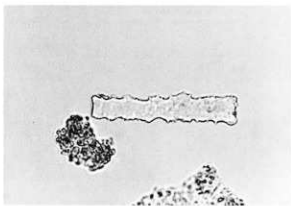
4 メダケ節型 トレンチ1 試料1



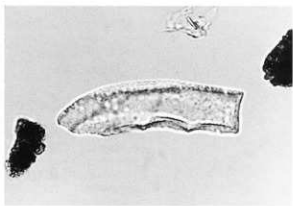
5 ネザサ節型 トレンチ1 試料7



1 クマザサ属型 トレンチ1 試料2



7 棒状珪酸体 3区SC-16 試料5



8 クスノキ科 トレンチ1 試料2



---

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第19集

まきの はる

## 牧の原第2遺跡

総合農業試験場畑作園芸支場整備事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 平成11年3月31日

編集発行 宮崎県埋蔵文化財センター  
〒880-0053 宮崎県宮崎市神宮2丁目4-4  
TEL 0985-21-1600  
FAX 0985-26-2634

印刷 株式会社 鉦脈社  
〒880-0855 宮崎県宮崎市田代町263番地  
TEL 0985-25-1758  
FAX 0985-25-7286

---